

東京国立文化財研究所要覽

1976

昭和51年度

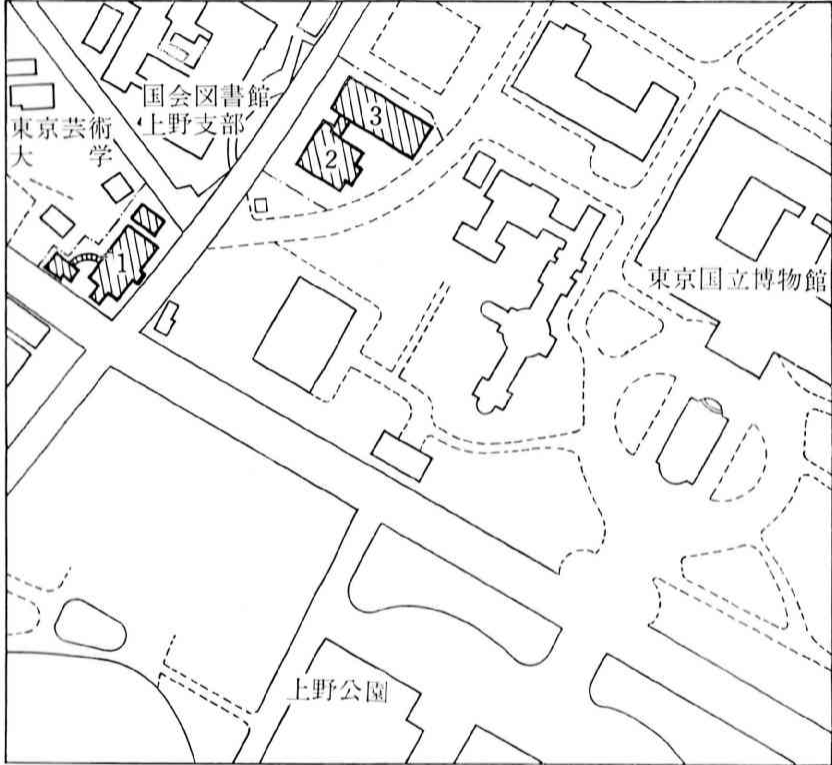


東京国立文化財研究所本館



東京国立文化財研究所別館

東京国立文化財研究所建物所在図



1. 美術部庁舎
2. 庶務課・保存科学部庁舎
3. 芸能部・保存科学部・修復技術部庁舎

は　じ　め　に

昭和51年度を顧みて、一般研究費の引き続き伸び悩みと、事業管理費の実質的な増大が、研究費を著く圧迫した。その中で『東大寺修二会の構成と所作』中（芸能の科学7）の大冊が予定通り刊行されたことに敬意を表したい。

方針として研究の重点を特別研究に移すと同時に科学研究費の獲得に鋒先を向けざるを得なかった。特別研究については、「浄土教関係の文化財に関する総合的研究」（4カ年間継続）の第3年度を推進する一方で「軸装等の保存及び修復に関する科学的研究」（3カ年間継続）を終了して、報告書「表具の科学」を刊行した。本書は世界で高く評価されている我が国の表具の伝統的修理技術を初めて科学的に解明するとともに、軸装及び額装の保存環境についても研究を進展させている点で注目されよう。

一方日本学会議の勧告に基づいて、文部省は昭和51年度から科学研究費で特定研究として「自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究」（3カ年間継続）を主題として取り上げたことは、文化財の科学的研究について全国から研究所・大学の研究者の参加を得て、学際的研究を推進する新しい試みであった。当研究所も独自の立場でこれに参加した。

科学研究費は都合9件5千万円余と大幅に増額された。その中で「戦後における日本・東洋美術史の発達に関する研究」に関しては関係学術論文をカード化しこれを分類し、情報索引するためにカード・セクターを設備した。また「同位体分析による古文化財の研究」に必要な高価な質量分析計も購入できたことは研究の高度化を期待しえんとして感謝に堪えない。

最後に久しく懸案であった情報資料部の新設が、美術部資料室を昇格させる形で、昭和52年度で認められ、古い写場・暗室及び車庫を取りこわし、写真資料研究棟を新築することが決定したことを付記する。

昭和52年8月

東京国立文化財研究所長 関野 克

目 次

I 沿革	1
1 設立の経緯	1
2 年 表	1
3 歴代所長	5
II 設立目的と機構	6
1 機 構	6
2 職種別予算定員	7
3 職 員	8
III 土地・建物	10
1 建物の面積・構造一覧	10
2 建物の平面図	11
IV 予 算	15
1 歳出予算	15
2 科学研究費	15
V 調査研究	16
1 美 術 部	16
(1) 概 要	16
(2) 研究調査活動	18
A 一般研究	18
B 特別研究	23
C 科学研究費	24
2 芸 能 部	25

(1) 概 要	25
(2) 研究調査活動	27
A 一般研究	27
B 特別研究	29
C 科学研究費	30
3 保存科学部	31
(1) 概 要	31
(2) 研究調査活動	33
A 一般研究	33
B 特別研究	37
C 受託研究	38
D 科学研究費	40
4 修復技術部	43
(1) 概 要	43
(2) 研究調査活動	44
A 一般研究	44
B 特別研究	48
C 受託研究	48
D 科学研究費	50
5 主要研究業績	51
6 その他の研究活動	64
7 学位授与	65
VI 事 業	66
1 出 版	66
(1) 美術研究	66
(2) 芸能の科学	67
(3) 保存科学	67
(4) 表具の科学	68
(5) その他の出版物	69

2	開所記念行事	72
3	公開学術講座	74
4	会 議	74
5	国際交流	75
VII	研究施設・設備	78
1	蔵 書	78
2	資 料	79
3	機 器・設 備	80
4	黒田記念室	84
5	閱 覧 室	84
VIII	旧 職 員	85
IX	関係法規	86

I 沿 革

1 設立の経緯

本研究所以、昭和27年4月1日発足したのであるが、その前身であり母胎となったものは、昭和5年に創設された帝国美術院附属美術研究所である。

この美術研究所は、大正13年7月、故帝国美術院長子爵黒田清輝の遺言により美術奨励事業のために出捐した資金で遺言執行人が選択決定した事業である。すなわち遺言執行人代表伯爵樺山愛輔は、故子爵の遺志にしたがってこの資金で行うべき事業の選定を伯爵牧野伸顕に一任した。牧野伯爵は帝国美術院長福原鏡二郎及び東京美術学校長正木直彦とはかって諸方面の意見を徴し、また我が国美術上の必要に照らして次の事業を行うこととした。

- (1) 美術に関する基礎的調査研究機関として美術研究所を設けること。
- (2) 黒田子爵の作品を陳列して同子爵の功績を記念すること。
- (3) 前二項の目的を達するために適当な建物を造営すること。
- (4) 事業成立のうへは一切これを政府に寄附すること。

2 年 表

昭和元年12月 前記の事業を遂行するため委員会が設置され、東京美術学校長正木直彦が委員長に就任し、美術研究所事業について東京美術学校教授矢代幸雄、黒田子爵作品陳列について東京美術学校教授久米桂一郎・岡田三郎助・同和田英作・同藤島武二及び大給近清、建築造営について東京美術学校教授岡田信一郎、会計事務について遺言執行人打田伝吉を各委員として事務を分掌進行させた。

昭和2年2月 美術研究所準備事業を開始した。

同 年10月 東京市上野公園内に鉄筋コンクリート造、半地階2階建、延面積1,192㎡の建物1棟を起工した。

同 3年9月 前記の建物が竣工したので、美術研究所開設のため必要な備品・図書・写真等の研究資料を設備し、また館内に黒田子爵記念室を設け、同子爵の作品

沿革

を陳列した。

同4年5月 遺言執行人代表者榊山愛輔は、建物・設備・研究資料等一切の外に金15万円をそえて帝国美術院長に寄附を願い出た。

同5年6月28日 勅令第125号により帝国美術院に附属美術研究所が置かれ、東京美術学校校長正木直彦が同研究所の主事に補せられた。

同年10月17日 美術研究所開所式を挙行政した。

同7年1月 美術研究所の研究成果発表機関誌として、定期刊行物「美術研究」を創刊した。

同年4月18日 株式会社朝日新聞社より明治大正美術史編纂費として本年から向う5ヶ年間毎年5千円、合計2万5千円を帝国美術院に寄附したいとの申出があった。

同年5月26日 帝国美術院はこの申出を受理した。

明治大正美術史編纂委員会規程を設け、美術研究所は明治大正美術史の編纂に関する事務を行うことになった。

同9年10月18日 毎年10月18日を開所記念日と定めた。

同10年1月28日 鉄筋コンクリート造、2階建、延面積129㎡の書庫が竣工した。

同年4月 「日本美術年鑑」の編纂事務を開始した。

同年6月1日 勅令第148号により美術研究所官制が公布された。

研究資料閲覧規程を制定し、閲覧事務を開始した。

同12年6月24日 勅令第281号により美術研究所官制中改正の件が公布され、従来、帝国美術院に附置されていたのを文部大臣の直轄に改められた。

同年11月29日 美術研究所長職務規程、美術研究所事務分掌規程が制定された。

同13年2月12日 木造、平家建、延面積97㎡の写真室1棟が竣工した。

同19年8月10日 黒田清輝の作品、並びに写真原版を東京都西多摩郡小宮村谷間家倉庫に疎開した。

同20年5月28日 美術研究所の図書・諸資料全部を山形県酒田市本町1丁目本間家倉庫3棟に疎開した。

同年7月～8月 酒田市本間家倉庫に疎開した図書資料を爆撃の危険を避けるため、さらに酒田市外牧曾根村松沢世喜雄家倉庫・観音寺村村上家倉庫・大沢村後藤作之

丞家倉庫にそれぞれ分散疎開した。

同21年3月29日 酒田市疎開中の図書・諸資料等の東京向け発送を終了した。

同 年4月4日 酒田市疎開中の図書・諸資料等が東京に到着し引揚げを完了した。

同 年4月16日 東京都西多摩郡小宮村谷間家倉庫に疎開中であった黒田清輝作品並びに写真原版の引揚げを完了した。

同22年5月3日 美術研究所官制が廃止され、国立博物館官制が制定された。美術研究所は同館の附属美術研究所となった。

同24年4月 本年度から科学研究費により光学的方法による美術品の鑑識に関する研究が開始された。

同25年8月29日 文化財保護法の制定に伴い、美術研究所は文化財保護委員会の附属機関となった。

同26年1月31日 美術研究所組織規程（昭和26年文化財保護委員会規則第5号）が定められ第一研究部・第二研究部・資料部・庶務室が置かれた。（昭和25年8月29日から適用）

同27年4月1日 東京文化財研究所組織規程（昭和27年文化財保護委員会規則第4号）が定められ、美術部・芸能部・保存科学部・庶務室の3部1室が置かれ、美術研究所組織規程が廃止された。

同 年7月1日 芸能部研究室として東京芸術大学音楽学部邦楽科教室2室を同大学から借用し、研究を開始した。

同28年4月26日 保存科学部研究室は、国立博物館保存修理課保存技術研究室として昭和22年発足以来、東京国立博物館地階の1室に置かれていたが、同館構内の倉庫132㎡を改造のうえ移転した。

同29年7月1日 東京文化財研究所組織規程の一部が改正され（昭和29年文化財保護委員会規則第1号）、東京国立文化財研究所となった。

同32年3月28日 東京国立博物館構内に木造、外部鉄網モルタル塗、平家建、8㎡の保存科学部の薬品庫が竣工した。

同 年11月30日 従来の2階建書庫のうえに更に1階を増築3階建とし、増築分延面積71㎡が竣工した。

同34年4月30日 国立文化財研究所研究受託規程（文化財保護委員会告示第14号）が

沿 革

定められ、この年度から受託研究が開始された。

同36年 9月16日 東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され（昭和36年文化財保護委員会規則第1号）、従来の庶務室は庶務課となった。

同37年 3月31日 東京国立博物館構内に保存科学部庁舎として、鉄筋コンクリート造 2階建延面積 663㎡ の建物 1棟が竣工した。

同 年 7月 1日 東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され（昭和37年文化財保護委員会規則第1号）、新たに保存科学部に修理技術研究室が置かれた。

同 年 7月20日 芸能部研究室は、保存科学部庁舎の竣工に伴い、旧保存科学部庁舎に移転した。

同43年 6月15日 文部省設置法の一部が改正され（昭和43年法律第99号）、本研究所は文化庁附属機関となった。

同44年 8月23日 保存科学部庁舎に隣接して新営される別館庁舎（延1,950.41㎡）の起工式が行われた。

同45年 3月25日 前記の別館が竣工したので、同年5月26日竣工式が行われた。

同45年 4月22日 芸能部は、別館3階に移転した。

同45年 5月 8日 保存科学部は、別館の地階～2階に実験用機械類の移転据付を終った。

同45年 6月29日 保存科学部庁舎の1階の模様替工事に着手し、同年10月15日工事が終了した。

同 年11月 2日 所長及び庶務課は、本館から保存科学部庁舎の1階に移転した。

（本館は、美術部庁舎となる。）したがって研究所の所在地表示は「12番53号」を「13番27号」に変更された。

同46年 4月 1日 保存科学部庁舎及び別館の敷地 2,658㎡ を東京国立博物館から所管換された。

同48年 4月12日 文部省設置法施行規則の一部が改正され（昭和28年1月13日文部省令第2号）新たに修復技術部が設けられ4部1課となり、修復技術部に第一修復技術研究室及び第二修復技術研究室が置かれ、保存科学部修理技術研究室は廃止された。

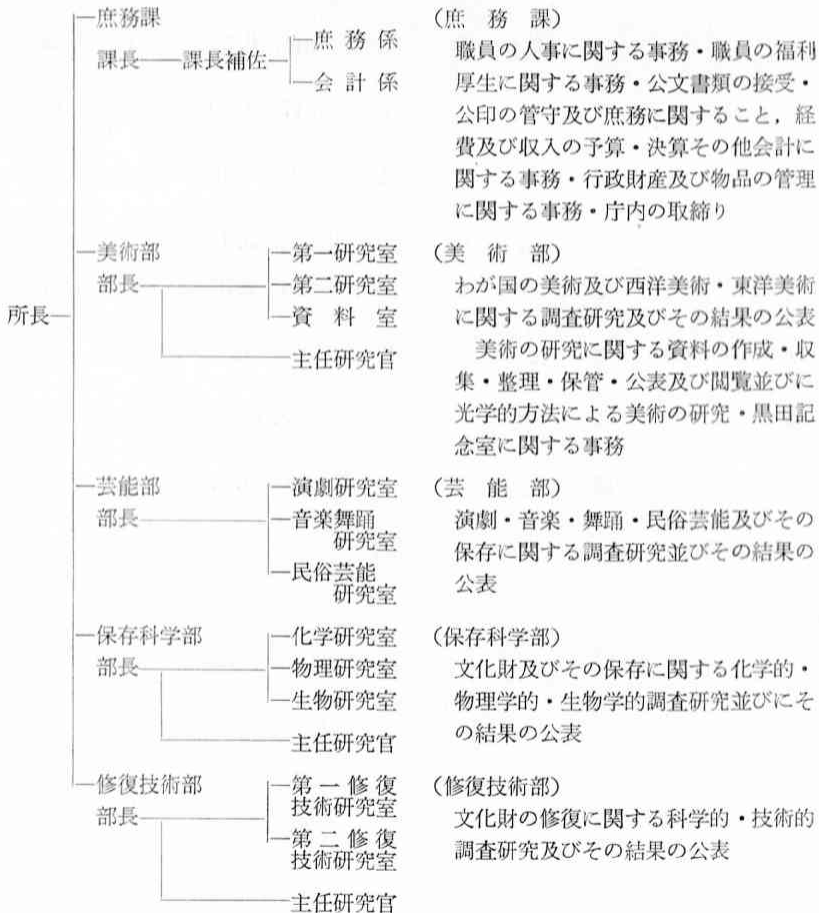
3 歴代所長 (昭和5年～昭和52年)

主 事	正 木 直 彦	(昭和 5. 6. 28～昭和 6. 11. 24)
主 事	矢 代 幸 雄	(昭和 6. 11. 25～昭和10. 5. 31)
所長事務取扱	和 田 英 作	(昭和10. 6. 1～昭和11. 6. 21)
所 長	矢 代 幸 雄	(昭和11. 6. 22～昭和17. 6. 28)
所長事務取扱	田 中 豊 藏	(昭和17. 6. 29～昭和22. 8. 15)
所 長	田 中 豊 藏	(昭和22. 8. 16～昭和23. 5. 10)
所 長 代 理	福 山 敏 男	(昭和23. 5. 11～昭和24. 8. 30)
所 長	松 本 栄 一	(昭和24. 8. 31～昭和27. 3. 31)
所長事務代理	矢 代 幸 雄	(昭和27. 4. 1～昭和28. 10. 31)
所 長	田 中 一 松	(昭和28. 11. 1～昭和40. 3. 31)
所 長	関 野 克	(昭和40. 4. 1～現 在)

Ⅱ 設立目的と機構

東京国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究、資料の作成及びその公表を行うことを目的として設立された文化庁の附属機関である。その機構等は次のとおりである。

1 機 構



2 職種別予算定員

区 分	50 年 度	51 年 度
指 定 職	1	1
所 長	1	1
行 政 職	12	11
課 長	1	1
課 長 補 佐	1	1
係 長	2	2
専 門 職	3	3
主 任	1	1
一 般 職 員	4	3
研 究 職	35	35
部長等研究員	10	10
室長等研究員	13	13
研 究 員	12	12
合 計	48	47

設立目的と機構

3 職 員

昭和52年 3月30日現在

所 属	官 職 名	氏 名
所 属 庶 務 課 庶 務 係 会 計 係 美 術 部 第 一 研 究 室 第 二 研 究 室 資 料 室	文 部 技 官, 所 長	関 野 克
	文 部 事 務 官, 庶 務 課 長	松 原 尚 躬
	文 部 事 務 官, 庶 務 課 長 補 佐	鶴 見 茂
	文 部 事 務 官, 庶 務 係 長	若 井 明 子
	文 部 事 務 官, 庶 務 係 員	松 本 多 賀 子
	文 部 事 務 官, 会 計 係 長	斉 藤 朗 彦
	文 部 事 務 官, 会 計 主 任	鈴 木 吉 隆
	文 部 事 務 官, 会 計 係 員	正 藤 隆 生
	用 務 員, 作 業 員	小 澤 た ま り
	事 務 補 佐 員	杉 浦 み ど り
	技 能 補 佐 員	豊 田 三 智 子
	作 業 補 佐 員	大 塚 正 司
	文 部 技 官, 美 術 部 長	川 上 涇 代 子
	文 部 技 官, 主 任 研 究 官	関 田 千 悦 子
文 部 技 官, 主 任 研 究 官	柳 村 澤 川 孝 子	
文 部 技 官, 主 任 研 究 官	猪 狩 川 和 栄 子	
文 部 技 官, 主 任 研 究 官	田 宮 実 次 郎	
文 部 技 官, 主 任 研 究 官	陰 里 鉄 健 之	
文 部 技 官, 第 一 研 究 室 長	久 野 正 三 郎	
文 部 技 官, 研 究 員	関 口 村 野 三 郎	
文 部 技 官, 第 二 研 究 室 長	中 上 野 三 郎	
文 部 技 官, 資 料 室 長	上 野 三 郎	
文 部 技 官, 研 究 員	江 上 武 元	
文 部 技 官, 研 究 員	鶴 田 武 元	
文 部 技 官, 研 究 員	河 野 武 元	
文 部 技 官, 研 究 員	米 倉 迪 弘	
文 部 技 官, 専 門 職 員	橋 本 弘 和	
文 部 技 官, 専 門 職 員	市 川 和 正	
文 部 技 官,	野 久 保 昌 良	

所 属	官 職 名	氏 名	
芸 能 部 演 劇 研 究 室	文部技官, 芸 能 部 長	三 隅 治 雄	
	文部技官, 演 劇 研 究 室 長	佐 藤 道 子	
	文部技官, 研 究 員	羽 田 昶	
	調査研究員(非)	松 本 雅	
	音楽舞踊研究室	柿 木 吾 郎	
	文部技官, 研 究 員(併)	横 道 萬 里 雄	
	調査研究員(非)	古 橋 宏 子	
	民俗芸能研究室	三 隅 治 雄	
	文部技官, 研 究 員	中 村 茂 子	
	調査研究員(非)	仲 井 幸 二 郎	
保 存 科 学 部	文部技官, 保 存 科 学 部 長	江 本 義 理	
	文部技官, 主 任 研 究 官	見 城 敏 子	
	化学研究室	文部技官, 化 学 研 究 室 長	馬 瀨 久 夫
	物理研究室	文部技官, 研 究 員	門 倉 武 夫
	物理研究室長事務取扱	文部技官, 研 究 員	江 本 義 理
	文部技官, 研 究 員	石 川 陸 郎	
	生物研究室	文部技官, 生 物 研 究 室 長	三 浦 定 俊
	調査研究員(非)	新 井 英 夫	
	修復技術部	文部技官, 修 復 技 術 部 長	西 川 杏 太 郎
	第一 修 復 技 術 研 究 室	文部技官, 主 任 研 究 官	中 里 寿 克
第一 修 復 技 術 研 究 室 長 事 務 取 扱		西 川 杏 太 郎	
文部技官, 研 究 員		西 浦 忠 輝	
文部技官, 研 究 員		青 木 繁 夫	
第二 修 復 技 術 研 究 室		文部技官, 專 門 職 員	茂 木 曙
文部技官, 第 二 修 復 技 術 研 究 室 長		樋 口 清 治	
文部技官, 研 究 員		増 田 勝 彦	

Ⅲ 土地・建物

本研究所の主な建物は、東京都台東区上野公園12番53号所在の本館と、上野公園13番27号所在の保存科学部実験室及び別館である。

土地は、本館の敷地1,457㎡保存科学部実験室及び別館の2,658㎡敷地の計4,115㎡である。

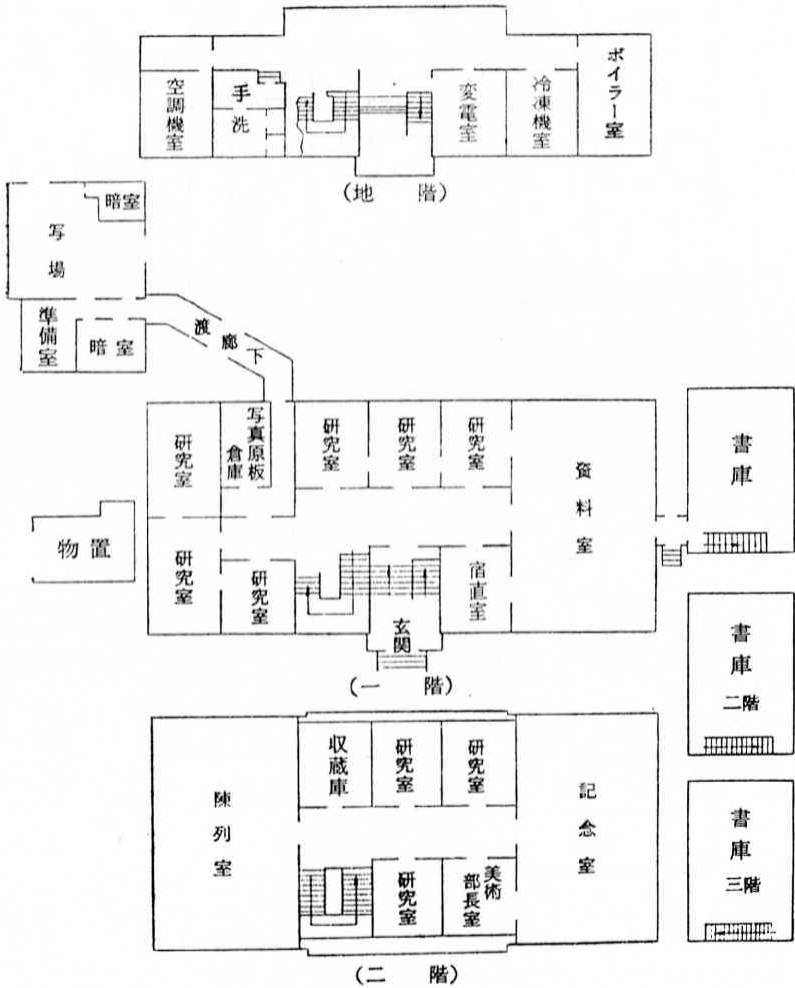
なお、建物の面積・構造等は、次のとおりである。

1 建物の面積・構造一覧

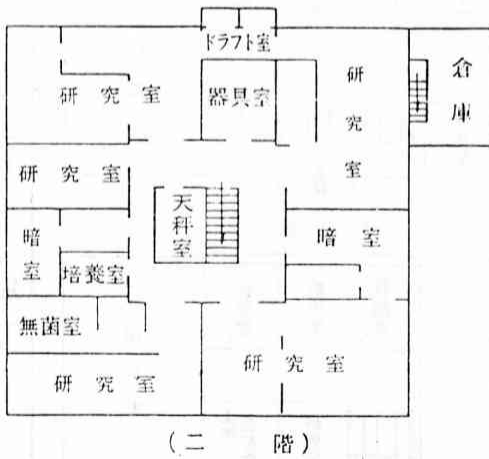
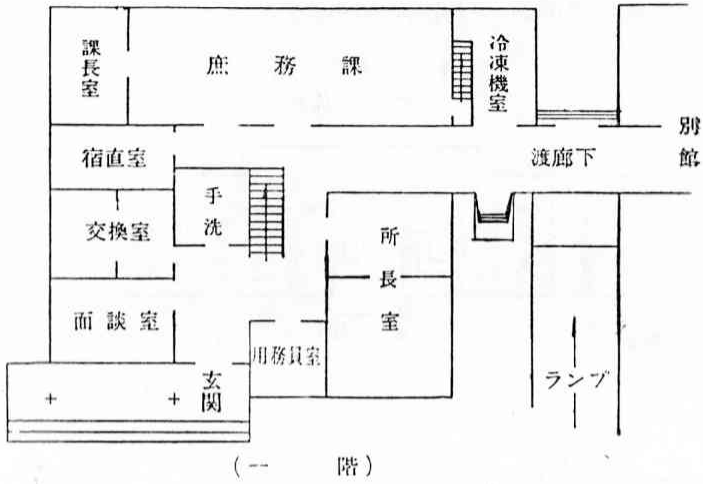
No.	名称	種目・構造	建面積 延面積	建築 年月日	No.	名称	種目・構造	建面積 延面積	建築 年月日
1	本館	事務所建 RC.地上 2階・地下 1階	$\frac{468.26}{1,192.72}$ ㎡	昭 3. 8. 30	6	渡廊下 (写場)	雑屋建 木造平家	$\frac{20.26}{20.26}$ ㎡	昭 13. 3. 25
2	書庫	倉庫建 RC. 3階	$\frac{64.63}{201.80}$	昭 10. 1. 25 (32.11.30 3階増築)	7	車庫 (現物置)	〃	$\frac{27.96}{27.96}$	昭 15. 9. 11
3	渡廊下 (書庫)	雑屋建 RC. 平家	$\frac{4.90}{4.90}$	昭 10. 1. 25	8	保存科学 部実験室	事務所建 RC. 2階	$\frac{338.44}{684.91}$	昭 37. 3. 28
4	写場及 第1暗室	雑屋建 木造平家	$\frac{62.80}{62.80}$	昭 18. 1. 8	9	別館	事務所建 RC. 地下 1階地上3 階塔屋付	$\frac{462.75}{1,950.41}$	昭 45. 3. 25
5	準備室及 第2暗室	〃	$\frac{35.12}{35.12}$	〃	10	渡廊下 (別館)	雑屋建 鉄骨 平造家	$\frac{27.60}{26.60}$	〃

2 建物の平面図 (各庁舎の縮尺不同)

美術部
(本館)

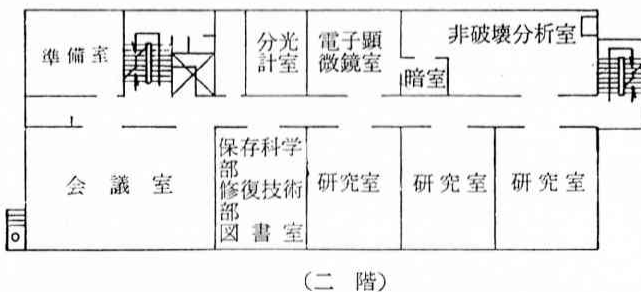
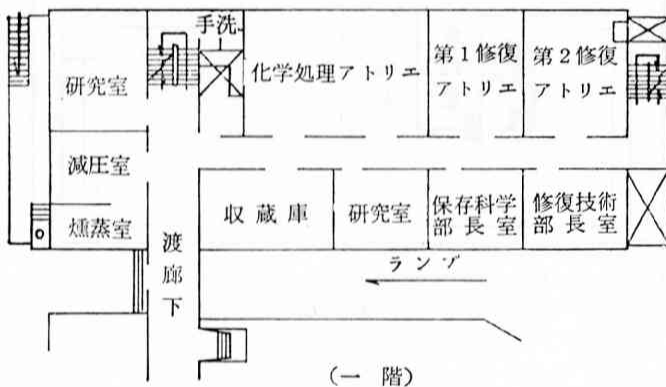
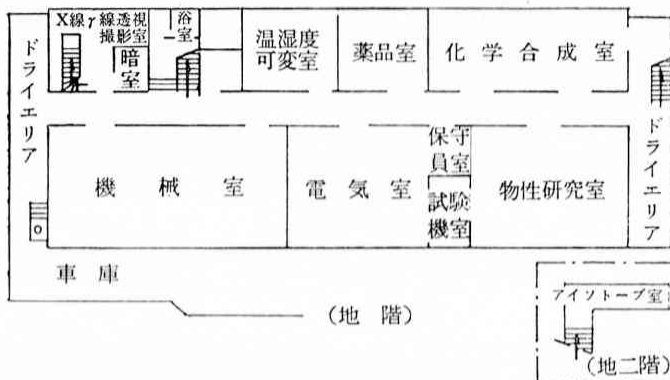


庶務課・保存科学部(実験室)

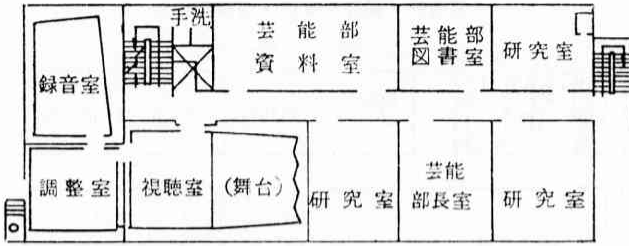


芸術部・保存科学部・修復技術部

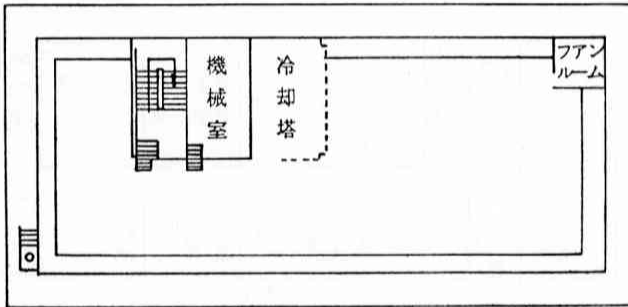
(別館)



土地・建物



(三階)



(屋上)

Ⅳ 予 算

1 歳出予算

注 () 内は補正後予算を示す。

区 分	人 件 費	物 件 費	施 設 費	合 計
	千円	千円	千円	千円
昭和50年度	(186,881) 174,843	(67,947) 72,681	(33,874) 33,874	(288,702) 281,398
昭和51年度	(196,740) 201,909	(71,828) 72,917	(16,810) 16,810	(285,378) 281,636

2 科学研究費

区 分	特定研究		一般研究		奨励研究		研究 成 果 行 費		合 計	
	件数	金 額	件数	金 額	件数	金 額	件数	金 額	件数	金 額
昭和50年度	0	千円 0	5	千円 8,350	2	千円 590	1	千円 2,240	8	千円 11,180
昭和51年度	3	9,900	5	41,400	1	250	0	0	9	51,550

内 訳

研 究 題 目	研究代表者	金 額	摘 要
科学的方法による古彫刻の構造、材質、技法の研究	久 野 健	千円 2,200	特定研究(1)
新設展示施設及び収蔵庫内の汚染現象と収納文化財への影響とその防除法	江 本 義 理	4,600	〃
古美術・古建築の主要材料である木材及びその化粧材料接着剤の劣化と修復処置後の耐久性・強度に関する研究	西 川 杏 太 郎	3,100	〃
戦後における日本・東洋美術史学の発達に関する研究	上 野 ア キ	10,000	一般研究(A)
同位体分析による古文化財の研究	馬 潤 久 夫	23,700	〃
能楽技法の総合的研究	横 道 萬 里 雄	4,600	一般研究(B)
伝統歌曲の音楽分析的研究	柿 木 吾 郎	1,600	一般研究(C)
薩摩坊津を中心とした民俗芸能の研究	三 隅 治 雄	1,500	〃
新しい赤外線工学による絵画の光学的研究	三 浦 定 俊	250	奨励研究(A)
計	9 件	51,550	

V 調査研究

1 美術部

(1) 概要

美術部は日本・東洋の古美術、日本の近代・現代美術とこれらに関連のある西洋美術についての基礎的調査と専門的研究を行い、その成果を公表するとともに、美術に関する研究資料を作成、収集、整理し、これらの資料を一般研究者の利用にも供し、美術史学研究における資料センターの役割も果している。現在3室に分かれ、古美術関係は第一研究室・資料室、近代・現代・西洋美術は第二研究室、資料の作成・収集・整理・保管等は資料室が担当する。

調査研究は美術部所属研究員の専門領域を中心として実証的に進められているが、学界現下の動向を把握するとともに将来の趨勢を洞察し、方法においても成果においても、基礎的・先駆的役割を果して、広く永く学界に寄与すべく努めている。そのため重要な問題に関しては共同研究を行い、また当部独自の光学的研究法を活用し、すでに多くの成果を取めた。

これらの業績は当部の機関誌「美術研究」(昭和7年創刊、年6冊発行)に発表し、大部の成果は臨時単行の研究報告書として刊行している。また毎年のわが国美術界全般にわたる動向を調査し、客観的資料の提供を主眼とした「日本美術年鑑」を編纂発行している。

研究資料の収集・作成などに関しては、当部の前身たる美術研究所として発足以来調査研究とともに力をそそいで来たが、毎年増大する資料の蓄積は、文化財関係事業等のためのみならず、部外研究者や、広く海外の研究者のためにも大きな寄与を果している。また「日本美術年鑑」には、毎年日本・東洋古美術並びに近代・現代・西洋美術に関する雑誌論文及び単行図書を分類集録した文献目録を編纂し、美術史学界をはじめ関連ある学界に著しく貢献している。なお古美術関係文献についてはさらに増補訂正を加え一定の年次をまとめて既に数冊刊行したが、前回の昭和11年～40年の分に引き続き、昭和41年～50年版の作成を準備中である。

美術部

以上のほか、調査研究成果の一部を広く一般の理解に資するため、毎年1回公開学術講座を開催している。

黒田清輝の遺産と遺作の寄附に基づいて創立された、美術部(旧美術研究所)の黒田記念室は、黒田の作品 その他関係資料を保管し、毎週一回、一般に公開していたが、空調工事のため目下閉鎖している。

第一研究室

第一研究室の研究員は、日本及び東洋諸地域の古美術について、各々専門とする領域と時代を中心に調査研究を進め、主要問題を捉えた共同研究を行い、また常に精密な基礎資料の収集に努めている。

一昨年度より4カ年計画で始まった芸能部と共同の特別研究「浄土教関係の文化財に関する総合研究」の中で、絵画・彫刻・書蹟・工芸の造型部門を資料室研究員と共に担当し、研究調査活動を行った。

文部省科学研究費による共同研究としては「科学的方法による古彫刻の構造・材質・技法の研究」(特定研究I・代表者 久野健)、「戦後における日本・東洋美術史学の発達に関する研究」(一般研究A・代表者 上野アキ)の一部を担当実施した。

なお、第一研究室で編集を担当する「美術研究」は、出版費不足のため、残念ながら本年度は第303号～第306号の4冊を発行するにとどまった。

第二研究室

明治以降美術史の調査研究、並びに現代美術の動向に関する資料の収集と調査を行っている。前者については時代的に西洋美術の影響が強いことから、それとの比較研究を進めている。

現代美術の動向に関する調査は、集積した年度資料を整理し、その結果を「日本美術年鑑」として毎年公刊してきているが、本年度は昭和50年(1月～12月)の内容を盛った昭和51年版の編集を完了した。刊行は都合で次年度に延期している。

資料室

資料室においては、美術部研究員の調査研究及びその成果の公表のための写真の作

● 調査研究

成、図書雑誌の購入を行い、これら研究資料の整理保管閲覧等に任ずるとともに、研究文献目録の作成に従事し、本年度は科学研究費による「戦後における日本・東洋美術史学の発達に関する研究」の実施に、推進力としての役目を果たした。

これらの業務のほか、資料室の研究員は、日本・中国・中央アジア等の古美術についての専門的調査研究を進めてその成果を公表し、浄土教に関する特別研究、他機関の科学研究費による総合研究「日本近世絵画における古典的伝統の調査と研究」（代表者 東京大学 山根有三）、「江戸時代障壁画の研究」（代表者 東北大学 辻惟雄）、「朝鮮の9～16世紀の仏教美術についての総合的研究」（代表者 実践女子大学 松原三郎）に参加した。

(2) 研究調査活動

A 一般研究

1. 日本彫刻史の研究

(1) 古代彫刻史の研究

本年度は従来行ってきた古代小金銅像を総合的にまとめ論文を書くべくこれまで十分調査を行っていない諸遺品を中心に研究を進め福江市明星院の如来像、松山市興隆寺の釈迦如来像、会津若松市羽黒神社の観音像、同福聚寺の観音像及び個人所蔵の金銅仏の詳細な調査を行った。（久野）

奈良飛鳥資料館において小金銅像の調査撮影、及び奈良岡寺本尊像に関する調査撮影を行った。（猪川）

(2) 平安鎌倉時代彫刻史の研究

京都清凉寺、神宮寺、滋賀延暦寺、広島照源寺、香川観音寺、鷲峰寺等の諸像の調査研究を行った。（猪川）

(3) 中世彫刻史の研究

運慶に続く湛慶、康円等慶派仏師の伝記的研究を行った。（久野）

(4) 尊像別分類による彫刻の研究

菩薩形諸像について奈良、京都、滋賀他の諸像の調査及び文献の整理を行った。（猪川）

2. 日本古代中世絵画史の研究

(1) 仏涅槃図の研究

前年度に引き続き、瀬戸内にある重要文化財指定品（尾道浄土寺、耕三寺、岡山自性院安養院）のほか、未指定品1件及び釈迦八相図につき詳細な調査と撮影を実施した。（柳沢・関口）

(2) 密教絵画の研究

前年度に引き続き、各種の密教尊像画、両界曼荼羅及び白描図像の調査研究と資料収集に努め、特に新資料である文保元年軸銘の浄土寺蔵両界曼荼羅図を紹介し（柳沢）、また西明寺三重塔柱絵金剛界三十二尊の様式的分析を行い、その成果を発表した。（関口）

(3) 真言八祖行状図の研究

前年度に引き続き調査研究を続行し、本年度は不空・善無畏行状図について詳細な調査を実施した。（柳沢）

(4) 垂迹画の研究

千葉県福善寺所蔵の四社明神図について調査。（関口）

(5) 科学的方法による古代絵画の材質・技法に関する研究

特定研究「科学的方法による東洋古代中世絵画の材質・技法に関する研究」に参加、教王護国寺蔵五大尊像、松永記念館蔵金棺出現図につき精密な調査と撮影を実施した。（柳沢・関口）

(6) 仏画に施こされた彩色文様および截金文様の研究

教王護国寺蔵五大尊像、松永記念館蔵釈迦金棺出現図について調査し研究資料を収集した。（関口）

(7) 経絵の研究

経典説話図の研究としては、根津美術館蔵十二因縁絵巻、畠山記念館蔵法華経絵巻の調査を行った。（宮）

(8) 絵巻物の研究

絵巻研究の一環として、本年度は、合戦絵巻について既発表の論文を全面的に増補改訂し、現存する中世合戦絵を集大成する作業を行った。この成果は52年度中に刊行する見込である。また、武藤家蔵歎喜天靈験記についての研究をまとめ、「美術研究」

調査研究

に発表した。本年度調査した作品は、天狗草紙、秋夜長物語絵巻、三十二番職人歌合絵巻、融通念仏縁起等である。(宮)

(9) 鎌倉時代肖像画の研究

鎌倉時代肖像画に関する資料の収集、就中、藤原隆信に関する「松雲寺文書」の調査、藤原信実の絵事に関する史料の検討、信実の末裔の画人達の基礎史料の検討を行った。(米倉)

(10) 厳島神社五重塔初層壁画の研究

同壁画中、特に真言八祖・瀟湘八景図、観音図、柱銘文に関する調査を行った。(米倉)

3. 日本古代中世の料紙に施された絵画の研究

(1) 経典装飾絵画の研究

本年度は前年度に調査した平安中期の延暦寺蔵紺紙金銀交書法華経の表紙絵、見返絵を中心に研究を進めた。近く「美術研究」に発表の予定。(江上)

(2) 文学写本装飾絵画の研究

(1)とも関連して、古代中世文学写本の装飾絵画並びに経典の荘厳画が桃山時代の料紙下絵に与えた影響を具体的に研究した。近く論文を発表の予定。(江上)

4. 日本古代文様の様式的、形式的研究

日本独特の文様である、いわゆる直弧文鏡の文様について、あらためて研究し、大陸の文様との関係を指摘した。(江上)

5. 近世絵画資料の収集と研究

(1) 宗達光琳派の研究

科学研究費総合研究「日本近世絵画における古典的伝統の調査と研究」に参加、仁和寺所蔵『御室御記』などを調査した。(河野)

(2) 円山派の研究

円満院所蔵円山応挙関係資料の準備調査をした。(河野)

(3) 復古大和絵派の研究

科学研究費総合研究「江戸時代障壁画の研究」に参加、大樹寺岡田為恭筆障壁画などを調査した。(河野)

(4) 江戸洋風画について研究

オランダ国立ライデン民族学博物館所蔵の川原慶賀作品に関する調査を続行すると並行して日本所在の慶賀作品の調査研究，更に長崎派の他の画家をも研究対象に拡大，その成果の一部は「美術研究」306号ほかに発表した。（陰里）

6. 日本近代美術史の研究

(1) 近代彫刻家の研究

長年，荻原守衛に関する調査研究を進めてきたが，本年度の後半は，「荻原守衛とその周辺」を纏めるにつき，特に彼の絵画作品に留意し，明治洋画史上の価値づけに考察を深めた。（中村）

前年来の竹内久一に関する調査研究を続行した。次年度に論文発表の予定。（中村）

(2) 日本近代絵画史の研究

明治以降の肖像画家について調査研究を進めた。日本画，洋画ともに近代における肖像画研究は極めて少ないので，明治・大正・昭和の具体的作品の探索を行い，これを纏め京都国立博物館夏期講座で発表した。（関）

明治初期における洋画家及び洋画教育の実態について調査を進め，洋画家川上冬崖の作品を調査して報告し，また来日イタリア人画家A・フォンタネージと日本の洋画家との関係について調査研究した。（陰里）

明治後半期以降の日本における印象派の移植とその展開の様相について調査を続行した。（陰里）

日本美術院系統作家の研究の一環として，本年度は小林古徑の調査研究を行った。小林古徑については，従来上京以前の作品と動静について殆ど明らかにされていなかったが，出身地新潟県上越市で調査を行い，伝記上の新資料若干を得た。次年度発表の予定。（関）

7. 日本工芸史の研究

現在は陶磁・漆工・金工の研究員は不在で，染織専門の研究員が必要に応じこれらの調査にも当たっているが，主なる研究題目及び調査活動は下記の通りである。

- (1) 近世初期染織品の研究
- (2) 小袖の研究
- (3) 伝統的染織技術の調査・研究
- (4) 上代裂の研究

調査研究

研究題目の中、特に力を注いでいる「近世初期染織品の研究」に関しては、上杉神社蔵の上杉謙信所用袴類、宮城県白石市の片倉家伝来私服・陣羽織類、和歌山市の紀州・東照宮伝来服飾類の調査が本年度の主なものである。「小袖の研究」は紀州・東照宮蔵家康所用小袖四領（うち三領は昭和52年3月重要文化財に指定された）の調査研究と片倉家伝来黒縞子小袖の修復技術部との共同研究（修復技術上の）、徳川黎明会所蔵の尾張徳川家三代綱誠所用縞麻羽織の調査研究が主となり、「伝統的染織技術の調査・研究」は「型染」「絞り染」「緋」「紬」「花織」等の調査研究のため前年度に引き続き再度の沖縄行、本島及び八重山・宮古群島・久米島における現地調査を行った。なお日本伝統工芸展の審査員として加った。「上代裂の研究」は東京国立博物館蔵品の法隆寺裂や正倉院裂、昭和51年秋の正倉院展出陳染織品の調査を通じて進めた。（田実）

8. 和漢書道史の研究

(1) 日本書道の歴史的研究

1) 日本書道史平安朝篇を観察するのに、それを代表する三蹟の観察からこれを行うを便と考え、その作品及び伝記を科学的に検討し、その日本書道史において如何なる地位をきざぎ、そして如何なる意義を今後の書道史上に主張するかを論評した。（田村）

2) 情性的になっていた江戸時代の書道を立ちなおらせる努力は、同代末期から見られ始めたが、明治に入って政治・社会の一大変革と共に、心ある書家の識見をまわって頗る見るべきものがあるに至った。この注目すべき現象に対していささか考察をほどこした。（田村）

(2) 異体字の歴史的研究

多年継続した異体字の歴史的研究は漸く中世に及ぼうとするので、新しく宋風の書の感化の見られる親鸞書蹟中の異体字に研究をむけた。（田村）

9. 中央アジア古代絵画史研究

本年度この主題により在外研究員として外国出張を行った。幸いにベルリン国立博物館において、ル・コック収集中央アジア壁画の現存する約400点を調査し得たほか、米国諸施設及びパリ、ギメー美術館で断片類多数を調査し、得るところ多大であった。これらの調査結果に基づき研究を続行中。（上野）

10. 朝鮮仏画の研究

科学研究費総合研究「朝鮮9～16世紀の仏教美術についての総合的研究」(代表者 実践女子大学教授 松原三郎)の絵画部門の研究調査を続行中。本年度は熱海美術館 重文阿弥陀三尊像ほか、アメリカ、イギリス、ドイツに所在する作品も含めて、高麗画、李朝画、高麗と元の接点にある作品など約20点を調査した。(上野、江上)

11. 中国絵画史研究

(1) 敦煌画の研究では、白鶴美術館蔵の2点のほか、大英博物館、ギメー美術館、米國諸施設で、記年作品を含む主要作例約40点を調査した。(上野)

(2) 経常的に行っている宋元明清及び民国期の作品並びに画家資料の収集と調査を継続した。(川上・鶴田)

(3) 明清文人画家の書蹟の調査研究を大阪市立美術館を中心にを行った。(川上・鶴田)

12. 現代美術の動向についての研究

国・公立美術館をはじめとして各私立美術館、画廊等で開催された国内外の作家作品による近代・現代美術の展覧会を随時調査し、作品写真・目録などの資料蒐集を行った。各部門の担当は下記の通りである。

彫刻・立体造型(中村)

日本画(関)

洋画・版画(陰里)

B 特別研究

「浄土教関係の文化財に関する総合的研究」

研究代表者 美術部第一研究室長 久野 健

分担課題

七、八世紀の阿弥陀如来像とその背景 (久野健)

浄土教関係諸尊像の様式変遷の研究 (猪川和子)

阿弥陀往還来迎図の研究 (柳沢孝・関口正之)

フリア美術館蔵の六道絵 (江上綏)

出相阿弥陀経について (宮次男)

調査研究

親鸞聖人筆蹟の研究（田村悦子）

唐宋浄土教美術資料集成（川上涇・鶴田武良）

朝鮮における浄土教絵画（上野アキ）

日本の文化史上、仏教の占める位置は極めて重要であるが、特に、平安時代中期以降浄土信仰は、宗派にかかわることなく広く普及し、国民生活と密着して展開してきた。そのため浄土教が文化に及ぼした影響は多大である。よって、浄土教とそれに関する有形、無形の文化財との相互関係及び絵画・彫刻・工芸・芸能等各分野間の相関関係を、美術・芸能部門が総合的に調査研究するのをその目的とする。

本年度において重点的に行った調査活動については、彫刻部門では、7、8世紀におけるわが国の仏像の造像の理由を、文献及び遺品に刻された銘文等を検討することにより抽出した。これと平行して、7、8世紀の阿弥陀如来像中、最も古様を示す四十八体仏中の「山田殿像」の銘文と三尊像の制作年代の研究を行ったのをはじめ、7、8世紀の遺品の詳細な調査を行った。

絵画部門では、特殊な来迎図である阿弥陀往還来迎図の研究を推進したほか、經典説話図としての出相阿弥陀経を、奈良金剛寺蔵本及び京都知恩院蔵本について調査した。書蹟部門では、親鸞等の新宗教が宋から新たに輸入された仏書の研究のうえに成ったことと平行して、その書風の宋代書道の影響を受けているものと想定し、これを如実に示す宋の帝王の識を欠筆した字体を親鸞が用いていることについて調査・考察した。

C 科学研究費

1. 「科学的方法による古彫刻の構造・材質・技法の研究」（特定研究(1) 代表者 久野 健）

本研究に関しては、鑿石製と推定される法隆寺宝物館の栴香炉二組の蛍光X線分析を行い、拡大写真による調査では法隆寺戊子年銘釈迦及び脇侍像、野中寺弥勒像等の銘文を撮影調査し（久野）、木彫では浄瑠璃寺の四天王像中の一軀のX線透過撮影を行い、また、塑像では岡寺の如意輪観音像の詳細な調査を実施した（猪川）。これらの調査結果は、昭和52年1月28日に奈良教育大学で行った特定研究「古文化財」の総会において発表した。

2. 「戦後における日本・東洋美術史学の発達に関する研究」(一般研究(A) 代表者
上野アキ 分担者 美術部全員16名)

本研究は戦後30年間に飛躍的に発展した日本・東洋美術史学に関し、各部門別に研究史の資料を体系的に収集整理し、これらを総合することによって近年における斯学の発達をあとづけると共に将来に対する研究上の指標を得るのを目的とし、本年度は3年継続の初年度にあたる。

本年度は、まず資料収集の段階に集中するものとし、下記の諸項目を実施した。

- 1) 美術史学の最新の研究業績である各種図書、図録、複製等及び斯学と密接に関連する人文系各分野の多数の論文集等を購入した。
- 2) 多目的に使用しうる内容を盛った定期刊行物所載文献用及び図書用の2種類のカードを設計してセレクターにより能率的な分類及び分析検討を期し、文献採録も順調に進行した。
- 3) 近年特に活潑化した地方の諸美術館、博物館、教育委員会等の独自の研究調査活動及び企画展等につき、アンケート調査及び出張調査を行い、資料収集にあたった。

次年度は以上の諸項目を継続実施するとともに収集した資料の検討及び分析にあたり、研究目的達成へより前進する予定である。

2. 芸 能 部

(1) 概 要

芸能部は、日本の伝統芸能の保存に資するために必要な基礎的研究を行うことを目的とし、演劇研究室・音楽舞踊研究室・民俗芸能研究室の三室より構成されている。

芸能部の研究目標としては、諸芸能の理念・構造・技法・技術及びその継承保存に関する研究などがあり、その研究に必要な資料の収集・整備・記録の作成としての撮影・録音などの作業を行う。また研究の結果は刊行・公開学術講座の開催などによって公表する。

本年度は、共同研究としては「狂言の技法の研究」「陰囃子の構造の研究」「民謡の研究」等の課題について、部内研究員が2名ずつ組をつくって調査研究を行い、また

調査研究

部内研究員全員が美術部と共同による特別研究「浄土教関係の文化財に関する総合的研究」(49年～52年度4カ年計画第3年度)に参加して、浄土教関係の寺院行事の調査並びに資料の収集を行った。

また、各研究員は個々に研究課題を抱えて、実証的な調査活動を進めてきたが、それはいずれも文化財行政に直接的に寄与する基礎的な調査研究であると同時に、従来立ち遅れてきた我が国の芸能研究を推進せしめる力ともなる研究である。音楽舞踊研究室におけるメログラフを駆使しての歌曲の分析的研究や、演劇研究室における、芸能伝承の基盤をみる視点での寺院行事の研究などは従来の学界にはなかった先駆的画期的な研究といえる。

刊行物としては、『芸能の科学』7「東大寺修二会の構成と所作」中(執筆佐藤)を、前年の上巻に引き続いて52年3月に刊行した。同書はなお下巻・別巻の2冊を隔年に刊行の予定で、編集作業を続行している。また『芸能の科学』8「論考集」(執筆柿木・中村・三隅・仲井)を52年3月に刊行した。また、安原コレクション邦楽レコードの整理を続け、『音盤目録』Ⅲ・Ⅳの刊行準備を進めた。

恒例の公開学術講座は、「話芸の技法」をテーマとして51年12月に開催、研究者を対象とした連続研究発表会は「南島芸能史」のテーマで51年7月に行った。また「東大寺修二会の構成と所作」についての研究会を部内研究員によって毎週行い、また研究室ごとにラバン式舞踊譜 Labanotation の研究会、狂言伝書輪講会、能楽技法研究会などを行った。

演劇研究室

演劇研究室は、日本古典演劇について芸能学的・演劇学的に調査・研究を行い、またこれら諸芸能の周辺にあって伝統芸能の成立に深い関係を持つ諸分野についても、調査研究を進めている。

本年度、演劇研究室では、個人研究として「寺院芸能の研究」「歌舞伎演目の通行場名の選定」「能の脚本史の研究」を行い、共同研究として「狂言の技法の研究」、他の研究室との協力により「陰囃子の構造の研究」「浄土教関係の文化財に関する総合的研究」を行った。

音楽舞踊研究室

日本の音楽及び舞踊について芸術学的、音楽学的に調査・研究を行い、また、これら伝統芸能の成立に深く関係を持つ周辺諸分野についても調査・研究を進めている。

本年度の個人研究としては「伝統歌曲の音楽分析的研究」「音のデータの視覚化 transcription の研究——奄美大島の〈朝花〉の比較」が行われ、共同研究としては「陰雛子の構造の研究」「浄土教関係の文化財に関する総合的研究」が行われた。また外部研究者とのワークショップの試みとして「ラバン式舞踊譜 Labanotation の研究」が行われた。

民俗芸能研究室

全国各地に分布伝承する民俗芸能を対象とし、それらの芸能の保存・活用に資するために必要な研究を行っている。本年度は一般研究として「民俗芸能伝承方法の研究」「民俗芸能の民俗的基盤の研究」「民謡の研究」「話芸・寄席芸の研究」「古典芸能便覧作成の研究」を行い、特別研究として「浄土教関係の文化財に関する総合的研究」に研究員が参加して他の研究員と共に共同研究を行った。文部省科学研究費による研究としては「薩摩坊津地方を中心とした民俗芸能の研究」（一般研究(C) 代表者三隅治雄）を実施した。

また、例年行われる全国及び地方別の民俗芸能大会に出場した芸能の撮影・録音を行い、また和歌山県等各地民俗芸能大会の指導・助言を行った。

(2) 研究調査活動

A 一般研究

1. 民謡の研究

日本の民謡の研究において、民謡の芸術的要素を無視してはその全き姿をとらえることができないという観点より、上代から近世に至る日本の歌謡伝承の上に占める民謡の位置を究明する目的をもって、前年度に引き続き近世歌謡の分析を行い、あわせて童唄の中の遊戯唄の芸術的要素についての調査研究を行った。(仲井・三隅)

2. 民俗芸能の民俗的基盤の研究

芸能を、その行われる季節・場所・参加者(演者・観客を含む)などの面から取

調査研究

りあげる連続した研究の一環として、前年度は「道中の芸能」に関する調査を行ったが、本年度も引き続き「道中の芸能」に関する調査研究、とくに民俗芸能における来訪師の道行についての考察を進めた。(三隅・仲井)

3. 話芸・寄席芸の研究

落語を主として話芸・寄席芸を対象とする近世芸能の研究を安原コレクション邦楽レコードの整理を通じ続行中である。また、本年度は落語・講談を中心とした話芸の系譜の調査研究を行った。(仲井・三隅)

4. 民俗芸能伝承方法の研究

大神楽系獅子舞及び太鼓踊の伝承方法について資料の収集を行った。(中村)

5. 古典芸能便覧作成方法の研究

古典芸能の基礎資料となるべき年表・演目・作者・文献等を網羅的に集めた便覧作成の作業を進めた。(中村・三隅)

6. 風流系太鼓踊の研究

主として滋賀県、三重県、兵庫県等に伝承されている太鼓踊の資料収集を行った。(中村)

7. 狂言の技法の研究

狂言の演出の諸要素を研究する前提として、大蔵虎寛本・大蔵虎明本等による脚本構造(小段分析)の検討、江戸中期の型付書「間・狂言仕方附」の記載内容と現行演出の比較照合を行った。(羽田・松本)

8. 陰囃子の構造の研究

歌舞伎音楽の重要な要素である陰囃子の構造の研究。基本資料である付帳(実演の手順の記録)の中から通行演目120種に関するものを選び、その内容をカード化して分析を行った。(横道・羽田)

9. 寺院行事の研究

寺院行事が内包する多種多様な要素の中から芸能的要素を抽出し、各宗派にわたる総合的比較研究を行い、その変遷・分化をあとづけることを目的とするが、本年度は41年度以降継続的に実施している「東大寺修二会の研究調査」についての纏めと、特別研究による「浄土教関係の法儀の研究調査」に主眼を置いた。

前者に関しては、研究調査録の第二冊を「東大寺修二会の構成と所作」中として

刊行した。

後者に関しては、特別研究の欄に記した通りである。(佐藤)

10. 歌舞伎演目の通行場名の選定

歌舞伎技法の研究対象である通行演目表(119篇)に基づき、それぞれの昭和20～45年の上演記録を調査することにより、通行〈場〉名を選定、約300の通行場を確認した。(羽田)

11. 能の脚本史の研究

能の構想にも類型(様式性)が認められることから、その分析を通じて作者や時代による特徴をさぐることを目的とするもので、引き続き分析作業を進めた。(松本)

12. 伝統歌曲の音楽分析的研究

伝承・記録・保存のための基礎研究として伝統歌曲を音楽的に分析し、その音楽性を音楽学的に解明するもので、本年度は次の調査・研究が行われた。(柿木)

- (1) 仏光寺派声明「真回向」の録音と分析
- (2) 大谷派声明「正信偈・和讃」の分析
- (3) 山田・生田流箏曲手法の録音と比較分析

13. 音のデータの視覚化・transcriptionの研究—奄美大島の「朝花」の比較—

一つのジャンルとも解することのできる歌「朝花」の構造とその変化の許容範囲を示すことを目的とする。現地調査によって、多くの歌い手による「朝花」の録音及び歌い手の意識あるいは意図というような概念行動についてのデータを収集し、その分析に着手した。(古橋)

B 特別研究

浄土教関係の文化財に関する総合的研究

分担課題

念仏狂言の研究 (三隅)

練供養の研究 (三隅)

念仏踊の研究 (中村)

念仏讃の研究 (柿木)

六時礼讃の研究 (佐藤・羽田)

調査研究

日本文化史上重要な位置を占める浄土教信仰は、我が国民生活に密着して展開してきた。この浄土教に関する有形・無形の文化財について、美術・芸能両部が文化史的視野で総合的に研究することを目的とする。

本年度は、天台宗の法華懺法の研究調査及び特別録音と、浄土宗の重要法儀五重相伝会^{でんえ}の予備調査を行い、また千葉県各地の念仏芸、福島県白河・会津地方の念仏芸についての研究調査を行った。

更に本研究所録音室において、真宗仏光寺派声明の代表的旋律型の録音を行った。

C 科学研究費

1. 能楽技法の総合的研究(一般研究(B) 代表者 横道萬里雄)

能楽技法の細部を解明して、その全容を把握し、能楽の本質を探ることを期して研究を行った。本年度は、シテ方5流の型付・装束付、笛方一噌流・森田流の頭付・指付、小鼓方幸流・大倉流、大鼓方高安流・葛野流、太鼓方金春流の手付、狂言方大蔵流の型付を収集、それら諸資料の要素を単元に分けてカード化し、各単元の機能とその結合法則を確認した。(横道・羽田・佐藤・松本・三隅・柿木)

2. 伝統歌曲の音楽分析的研究(一般研究(C) 代表者 柿木吾郎)

従来最も研究の遅れている伝統歌曲の旋律法をメログラフによって音楽様式的に比較分析することを目的とする。

本年度は長唄(角兵衛・小鍛冶)、箏曲(千鳥の曲・春の曲)を複数の流派の演奏者によって録音し、これをメログラムにして比較分析した。

長唄および箏曲における歌唱様式の特徴、流派様式と個人様式との関係、日本式発声法の特性等について、新たに科学的・基礎的な知見とデータを得ることができた。

3. 薩摩坊津を中心とした民俗芸能の研究(一般研究(C) 代表者 三隅治雄)

本研究は、古代遣唐使船の発着地となり、また近世に至るまで中国・東南アジアとの貿易の拠点となった鹿児島県南部の坊津を対象とし、この地方に分布残存している民俗芸能を調査研究することによって、日本とアジア諸国との芸能交流のすがたを明らかにすることを目的としている。

本年度科学研究費の交付によって、坊津地方を三度にわたって実地調査し、坊津を中心とした薩摩半島南部の民俗芸能の分布状態をたしかめ、当地方の芸能分布図を作

成出来る段階に到達した。また今回の調査では、古代から明治維新前まで薩南地方の信仰の一中心として君臨していた坊津の真言宗の大道場一乗院を対象とし、この寺院がどのような形で信仰と芸能文化を海外へ運び出し、また海外のそれを吸収したかという点を探究した。

また、坊津および周辺地域には、長篇の物語を7.5または7.7の詞型で長々と歌い上げていく「口説」と呼ばれる形式の歌謡が数多く分布しており、これが他県他地方にも数多く認められることから、口説の流行がはたしてどこからもたらされたものか、それを追跡することによって坊津と他地方との文化交流のルート的一端が明らかになるかと考えて、この方面の研究を行った。いずれその成果は芸能部刊行の『芸能の科学』で発表する予定である。

3 保存科学部

(1) 概要

文化財の材質・構造に関する科学的分析研究、並びに文化財のおかれている保存環境の自然科学的研究を行い、これらを基盤として文化財の保存に関する技術的研究を行っている。研究の成果は文化財の指定・保存対策・修復処置の基礎資料として役立てられている。

また文化財の年代測定・産地推定の基礎的研究も手掛けている。

研究組織は化学研究室、物理研究室、生物研究室の3室からなっている。

調査研究の結果は、修復技術部との共同の機関誌「保存科学」により公表される。

化学研究室

文化財及びその保存に関する化学的調査研究（分析化学的調査研究を含む）並びにその結果の公表を職務としている。

文化財を構成している各種素材を分析・同定し、さらにそれらの材質の劣化・崩壊過程の究明を行っている。また劣化現象を環境・経過年数等と関連づけて追究している。

具体的には微量分析及び非破壊分析による無機及び有機質の材質・技法・劣化に関

調査研究

する研究、展示・保存環境における汚染因子並びにそれらの文化財への影響に関する研究等を行っている。

本年度から同位体分析による古文化財の研究を開始し、科学研究費（一般研究(A)）の交付を受け、質量分析計を設置した。これによって文化財の産地推定の本格的研究に取り組むことができるようになった。

物理研究室

文化財及びその保存に関する物理的調査研究並びにその公表を職務としている。文化財自体の構造・強度等の力学的試験を行い、X線、 γ 線のラジオグラフィによる内部構造、欠陥、虫害、腐朽の解明を行っている。また赤外線テレビによる銘記、下絵等の判読等にリモートセンシングの手法を取り入れる試みを行っている。

また保存環境に関し、採光、照明、温湿度等の影響とその防止の研究を行う他、展示、収蔵、梱包輸送の際の適正条件の設定と調節技術を開発し、新施設を使用する際の必要な処置の研究を行っている。

生物研究室

文化財及びその保存に関する生物学的調査研究並びにその公表を職務としている。黴・細菌・昆虫等による文化財の被害調査並びに黴・細菌・昆虫等の採取・培養・同定及びそれらの殺菌・殺虫等の防除用薬剤の選定と方法の研究と実施の指導を行っている。

以上の各研究室の担当研究員の専門分野の基礎的研究のほか、複合的な判断、処置を必要とする研究対象に対しては部内、部外（他研究機関を含む）との共同研究が行われている。

それらは展示施設に関する調査研究、輸送梱包に対する処置、虫被害の調査と対策及び高松塚壁画保存対策への協力等である。

特別研究「軸装等の保存及び修復技術に関する科学的研究」は修復技術部との共同研究で3カ年計画の最終年次として、各分担課題の実験結果が整理され、成果として纏め、「表具の科学」として刊行された。

受託研究は、修復技術部と協力して行った「広島市平和記念館保管被爆資料保存のための科学的研究」「国宝、重文日光社寺建造物の保存に関する研究」の2件、担当の「史跡虎塚古墳彩色壁画保存のための調査研究」及び「国宝東大寺金堂（大仏殿）鴟尾漆箔銅板の腐食状態に関する研究」の計4件が行われた。

科学研究費による研究は、本年度、特定研究に新たに「自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究」という研究領域が設置された。計画研究の五部門のうち保存科学部門に当部関係として「新設展示施設および収蔵庫内の汚染現象と収納文化財への影響とその防除法」（代表者 江本義理）、「文化財の虫歯害防除法の開発」（代表者 森八郎）の二課題が認められ、前者に部内全員、後者に4名が参加した。また同部門の他の研究課題、材質、技法、産地部門の研究課題にそれぞれ分担参加している。

(2) 研究調査活動

A 一般研究

1. 文化財の材質に関する研究

(1) 非破壊的方法、微量試料による諸分析法とそれらの精度向上に関する研究

青銅器の成分元素の組成を知るため、古銭を試料として原子吸光分析及び放射化分析を取り上げ、分析方法を種々検討し、Cu, Sn, Pb, As, Sb, Au, Ag, Co, Fe, Znの成分の定量を行った。

また、蛍光X線分析による土器、粘土中のFe, Sr, Rb, Y, Zrの各成分の定量法を確立した。(馬淵)

(2) 各種材質の判定及び年代、産地の標準的試料の材質に関する分析データの蓄積

柄香炉2点(法隆寺献納御物)、考古試料、銅戈20点(福岡市春日町出土)、銅鏃8点、ガラス類、鏡、装飾古墳彩色顔料(史跡佐賀田代太田古墳)等につき、主としてX線分析により材質を分析、技法との関連につき研究を行った。(江本)

(3) 発光分光分析法による文化財材質の研究

本年度購入した発光分光分析装置を用い、文化財材質の微量分析法を検討するため次の実験を開始した。

各種顔料の単体、複合体のそれぞれ基本スペクトルシートを作成するため、本年度

調査研究

は緑青、群青等数種類の顔料を分析した。

この研究は経常的に行い、各種材質の同定、劣化、汚染現象などの究明に関する研究に進める計画である。(門倉)

2. 文化財の保存および展示環境等に関する研究

(1) 文化財の輸送梱包および展示に対する保存科学処理

海外で開催した日本美術展覧会出陳の文化財について、燻蒸処置、密封梱包ケース内の調湿剤封入による湿度調整、防霉剤の封入、梱包時の温湿度測定等必要な協力および指導を行った。(石川・三浦・森・新井)

1) 神道美術展 (ニューヨーク: ジャパンハウス美術館 51.9~10 シャトル: シヤトル博物館 51.11~52.2)

2) 唐招提寺展 (パリ: プチ・パレ美術館 52.4~5)

また外国美術品の国内展等の展示ケース内の調湿および温湿度の測定等の協力、指導を行った。(石川・三浦)

1) 東慶寺展 上野の森美術館 (51.4)

2) 全米美術館収集世界名作展

国立西洋美術館 51.9~10

京都国立博物館 51.11~12

(2) 施設内保存環境の調査研究

展示室、収蔵庫内の温湿度、照明等の環境の測定、新設施設のシーズニングの検討を行い、展示・保存環境の適否に関し調査を実施している。本年度は次の2件を行った。

1) 神奈川: 遊行寺宝物館

2) 東京: 立川市民会館展示室

また、博物館・美術館の照明灯の分光特性のチェックと、紫外線・赤外線除去効果の測定を行った。最近開発されている紫外線除去フィルター、赤外線除去フィルターの効果の検討と選定を行った。

(3) 空気汚染が文化財に及ぼす影響に関する研究

本研究は経常的に行っているものであるが、本年度は、次項の実験を加えた。

1) 環境空気の分析法に関するもの

環境の異なる大気中に一定期間銀フィルターを曝露し、回収して表面を走査電子顕微鏡で観察した。またこれらの試料について反射率を測定した結果、住宅地と都心を比較すると都心が2～3倍の早さで変色していた。現在継続中。(門倉)

2) 文化財環境空気中の粉じんの研究

パーティクルカウンターを用い、微粒粉じんと温湿度との関係を調べた。粉じん粒子を0.5, 1.0, 2.0, 5.0, 10 μ の5段階に分けて同時に記録し、気象条件、季節変化及び室内の高さなどに対する挙動を検討している。(門倉)

(4) 文化財の材質の密閉封入内の保存に関する研究

文化財を温湿度の調整のみならず、不活性なガス(窒素、アルゴン等)を注入した密閉ケース内に保存し、劣化現象を最少に止める意図のもとに、漆、膠、染料、顔料等の各種材質の試片をケース内に放置している。

アクリル箱、金属箱の相違、構造、条件設定を検討するため、一定期間毎に試片の物性を測定し、構造劣化を調べている。(見城)

3. 昆虫、微生物等による文化財の生物劣化調査とその防除処置に関する研究

文化財の生物による被害は、昆虫と微生物が併発している場合も多く、それぞれの担当者が共同して調査に当り、昆虫類の同定、微生物の分離、同定を行って、発生原因を追究し、燻蒸等の防除処置を実施、指導を行っている。

本年度は下記について行った。

- (1) 東京国立博物館の燻蒸指導 (51.4)
- (2) 熊本県立図書館の虫害調査、その対策 (51.4)
- (3) 国宝如庵の燻蒸指導 (51.7)
- (4) 報国寺(水街道市亀岡)の虫害調査とその対策 (51.8) (以上 森)
- (5) イラク国カルベラ砂漠アル・タール遺跡出土・染織及び革製品の燻蒸実施 (51.8) (森・見城・新井)
- (6) 秋田県立博物館の燻蒸指導 (51.9) (森)
- (7) 桂離宮解体材の虫害調査とその対策 (52.3) (森)

4. 特史・国宝・高松塚壁画保存対策への協力

前年度に引き続き、文化庁が行っている高松塚壁画保存に関し、修復技術部と共同して、調査、保存処置に協力した。

調査研究

(1) 保存施設空調機械の調整時から平常運転にかけて、石室内、取合部、前室、外気の温湿度の基礎データの収集と自記記録計のデータの解析に努め、保存環境管理に協力した。

(2) 壁画修復処置の作業環境保全のため、炭酸ガス、溶剤の除去装置を数段階のテストを経て、空調機と組合せて除去法を確立した。

(3) 従来通り長期間密閉後の石室開口時には、石室内の空気組成、温湿度、微生物因子の測定を行った。また閉鎖直前の石室内外の微生物因子の採取、殺菌処置等を行い基礎的データを収集した。(江本・門倉・新井・三浦)

5. メスバウアー分光法による土器・瓦等の産地及び製作技法の推定(東京大学との共同研究)

メスバウアー分光法によると、土器・瓦等に含まれている鉄の状態分析を行うことができる。鉄の酸化・還元状態は産地の粘土の特性と焼成の条件に依存して変化すると考えられるので、状態分析により産地・技法の特質を知り、それらを推定することができる。

試料として土器一群馬県三原田遺跡出土の未焼成及び焼成土器3点、瓦一宮城県多賀城跡出土の平瓦3点、同県加美郡日の出山窯跡出土の瓦20点、ほかに現代瓦及び原料粘土を取上げ、これらについて、加熱実験も加えて測定を行った。Fe(III)とFe(II)の化学ソフト、磁気分裂等を定量的に識別でき、土器の未焼成土器確認ができる等、考古学上の問題の解明に応用できることが確認できた。測定は東京大学で行っている。(馬淵、江本、東京大学理学部助教授・富永 健、同助手・竹田満洲雄)

6. 古代青銅器の科学的研究

銅才、青銅鏡、銅鐸等の製作技術の追究を行っている。蛍光X線分析、X線透視により遺物について材質、鑄造および加工状態を知り、鑄型の熱分析等により鑄造技術に関する基礎調査を行っている。

青銅の主成分の配合比を変えた試料を作製し、偏析状態や実際に鍛造加工を施し、物性の変化を追究している。(石川・江本)

7. 考古遺物、遺跡に関する考古化学的研究

発掘時に埋蔵環境での変質と保存環境での変壊を考慮して、遺物の取り上げ時に考古化学的調査を行うための測定項目、方法等を確立するため、変壊生成物等を分析、

変質機構、測定法等を前年度に引き続き検討している。

横穴、遺構等の保存対策として本年度は装飾古墳、佐賀：史跡田代太田古墳、福島：史跡羽山横穴の保存施設の完成直後の状況を調査した。

熊本：史跡鍋田横穴群の外壁部変質物等の分析を行い原因究明、対策を検討中である。

江差：開陽丸遺物引揚げに関しては、委員会に委員として出席、保存処理法について指導した。遺物の材質調査では金具類のうち真鍮の銅と亜鉛の配合比が今日の配合比と異り銅の多い配合比で、近世ヨーロッパの金属材料の材質を知る上で興味ある結果を得た。また遺物に附着している推積物を分析し、遺物の変質との関連を調査している。(江本)

8. 漆塗膜の硬化・劣化過程の研究と保存対策

(1) 初めて、漆の木から樹液を採取したものを入手し、漆液の分析をした。この漆液を用い酸化機構を追究し、塗膜の粘弾性等の物性を調査した。

(2) 古代漆の分析法を開発するため、成分の分離法を検討し、薄層クロマトグラフ、赤外吸収分析法等により精度の向上に努めた。

(3) 年代のわかった古代漆試料に関し、組成や物性の変化等、分析データの蓄積をはかっている。(見城)

9. リモートセンシングの文化財への応用

リモートセンシングは、元来「対象に対して非接触でデータを集録する」という測定技術を意味するが、現在は、主として地球の環境評価や資源探査を目的とする特定の技術に対して用いられている。文化財においても不明瞭な画像や、色々な情報の重なった画像から、希望する特定の画像だけを補正して取り出す画像処理の技術が有効であると考え、基礎的な調査と実験を行った。また、前年度に引き続いて第2回リモートセンシングシンポジウム(51.11)に参加した。(三浦)

B 特別研究

軸装等の保存及び修復技術に関する科学的研究

(江本・馬淵・見城・門倉・石川・三浦・新井・森)(修復技術と共同研究, 48頁参照)

調査研究

C 受託研究

1. 国宝・重文日光社寺建造物の保存に関する研究（修復技術部と共同研究，関連項目48頁参照）

日光二社一寺所管の指定建造物の外装として用いられている漆塗装，彩色について，日光の多湿，寒冷という特殊環境下での劣化，変色等の原因究明と保存対策を立てるのを目的としている。

本年度の研究課題は，次にあげる2研究である。

(1) 防黴剤の薬物試験と薬剤の選択

前年度，サイアベンタゾール (TBZ)，チモール，オルトフェニールフェノール (OPP) の三種の防黴剤について，その濃度と材質への影響を検討した。その結果，TBZは0.1%，チモールは2.0%，OPPは0.5%のエタノール溶液が材質に影響のない濃度であった。

本年度は上述の結果に基づき，それぞれの防黴剤を，檜材に顔料（黄土，緑青，朱，ベンガラ）を塗布した手板に噴霧処理後，黴カビ，青カビ，クラドスポリウム，トリコデルマの4種のカビ胞子を散布し，30日間培養して防黴効果を判定した。

結果は，TBZは0.1%以上で効果があり，0.5%で完全に阻止効果を示した。チモールは，5%で阻止効果が明らかであるが，OPPは0.5%で効果を示したが持続しなかった。

この結果，チモール2.0%，OPP0.5%のエチルアルコール溶液の0.05 ml/cm²表面処理では防黴効果は期待できないが，サイアベンタゾール0.1%，0.5%処理ならば効果を期待できる。さらに日光社寺の自然環境で実施するときは0.5%溶液による表面噴霧が必要であることが明らかとなった。（新井）

(2) 漆塗装及び唐油彩色，生彩色の劣化現象

漆塗装に関しては，重文大猷院二天門の朱漆の変色，剝離の原因究明のため，現地調査を行い，その際採取した剝離片等につき分析し漆，ベンガラの割合を出した。ベンガラ漆の上に塗ったすき漆の品質に問題があるように判断された。

重文東照宮本殿・透扉格狭間の上下長押しに施された唐油彩色，生彩色の変退色の原因を究明するため，紫外線による劣化を予想して変色部位と日照の関係，照度と光量を秋期に測定した。積算光量の測定法を試験した。

顔料の変色現象につき、修理工程と同一手法により修理事務所で作成した手板試料（群青、緑青、黄土、朱、辨柄）を長押上下に設置し、劣化試験に供し、大猷院に設置した漆および合成塗料の塗装試片とともに変化の観察、色彩計による測定を行い、長期継続を計画している。（江本・見城・三浦・西川・中里）

環境の基礎データとして必要な温湿度調査は東照宮（西廻廊、南西隅）二荒山神社（本殿・北西隅）大猷院（二天門）で前年度より観測点を幾分移動して測定を行っている。（三浦）

2. 重文・国宝・東大寺金堂（大仏殿）鴟尾漆箔銅板の腐食状態に関する研究

鴟尾に使用されている漆箔銅板の金箔及び銅板の折損、破損劣化状況を調査し、再使用の可能性及び取り替材の選択のための資料とする。

銅板のかしめ部分等の折損、磨耗及び腐食の程度、金箔の磨耗、剝離につきX線を透視、顕微鏡写真撮影等により調査研究を行った。

銅板の材質は、銀、鉛、鉄を不純物として微量含む銅で、いわゆる「山がね」である。金箔は厚み5ミクロン程度で一枚張りである。

かしめ部分は局部腐食が認められる箇所が多く、折損、破断している所もある。金箔はピンホール、スリ傷が多く、それらによる腐食が、金箔の下に喰込んでい部分が多いので長期間には金箔の剝脱が広範囲に及ぶことが予想される状態であることが判明した。（江本・石川）

3. 虎塚古墳石室彩色壁画保存のための調査研究

発掘調査後、埋戻したまま石室内の環境を調査してきた。本年度は過去のデータのうち欠落部（6・1・3月）の測定を行い、石室内の温湿度、空気組成と外気の四季変化との関係及び微生物の消長について調査した。

石室内は温度13~17°C、湿度95~98% R. H.、空気組成は酸素17~18%、窒素75~76%、炭酸ガス3~4%で、酸素、窒素は標準大気に比して低く、炭酸ガスは100倍の値を示していた。（昭52.1月、40ヶ月経過）また微生物に関しては、40ヶ月目の測定で細菌数210~330個/m³、糸状菌数200~225個/m³であった。15ヶ月目と数の上では変化なく、空気組成と共に石室内は安定した状態となってきたことを示している。

石室内温度は外気の四季平均温度変化に比し、振幅は1/5より小さく、位相のずれ

調査研究

は3ヶ月程度遅れた周期で変化しているように推定され、さらに測定をふやすべく、次年度も継続する。(江本・新井・見城・門倉)

4. 広島平和記念資料館保管の被爆資料保存のための科学的調査研究(修復技術部と共同研究, 50頁参照)

不活性なガス封入の亚克力展示ケース内環境保持法の研究

前年度の単一ケースの実験を基に、同型の三連のケースにつき、コック、パッキングを改良し、シーラーの選択、加湿した窒素ガスの経済的封入又は流し方の調整法を2~3検討し、良好な結果を得た。実際の展示に際してその中から選ぶこととした。また空気の洩入を検知するモニター試験紙についても研究を継続している。(見城)

D 科学研究費

1. 新設展示施設及び収蔵庫内の汚染現象と収納文化財への影響とその防除法(特定研究(1) 代表者 江本義理)

新設の展示・収蔵施設内での損傷は、コンクリートに含まれるアルカリ性成分や、内装建材に起因する因子、及び生物汚染によるものが予想される。これらの実態を正確に把握するため、汚染因子、温湿度と光等に関連した相互の相乗作用を調査する。館内環境の各因子の測定法、収納品への影響の判定法を確立し、保存展示環境の標準的諸条件を設定して、その防除法を研究する。

本年度は、(1) 施設の環境調査と、(2) 汚染因子の材質への影響実験に重点を置き、「枯らし」の時期、展示・収納の適否の判定を行うためのモニター(テストピース)の選定を目標とした。

(1) 施設の環境調査

新設収蔵庫として岡崎市所在、大樹寺収蔵庫をとりあげ調査対象とした。同収蔵庫は建物の断熱効果を上げるため二重屋根、二重隔壁を持つ躯体構造で、庫内に方丈の将軍の間を再現し、重文の襖絵をはじめ込み展示・収納する方式を採用している。庫内の環境状況と空調機の運転条件を定めるべく、方丈将軍の間その他の部室、庫内等の温湿度・汚染因子をきめ細かく測定し、テストピースによる測定を行った。また京都市、妙蓮寺・智積院・高山寺の10年近く経過した収蔵庫につき、環境の比較調査を行った。

(2) 汚染因子の影響判定用モニターの選定

コンクリートのアルカリ性因子、内装木材の揮発成分の影響の実験及び実地測定を行い、アミノ油含浸沔紙、密陀僧、銀、銅、鉄板、染料、油絵具の試料等はモニターとして使用できることが明らかとなった。

2. 文化財の虫徴害防除去の開発(特定研究1) 代表者 森八郎)

文化財の虫徴害防除去における基本的な考え方は、文化財の材質に変質・変色などの悪影響を及ぼさず、加害生物を殺滅、防除するところにある。本研究は、文化財材質に悪影響を及ぼさず殺滅剤の選定と、文化財に即した防除法の開発を目的とした。

本年度は、木質文化財(木造建造物、木彫仏像、屏風、絵画等)、紙質文化財、織物文化財(毛織物、絹、麻、木綿等)、その他の加害昆虫のモノグラフを実態調査に基づいて作成した。市販の6種の燻蒸剤の殺虫・殺菌効果について検討した。(森・大槻)

材質への影響では、影響の認められない最少薬量、湿度の影響、燻蒸後の脱着試験を実施した。ホストキシンは、銅を含有する材質と反応して黒色物質を生成し、DDVPは密陀僧に変化を与えた。(林・見城・三浦)

燻蒸終了後の残留ガスの処理方法は、大気汚染と関連する重要な問題であるので、活性炭による残留ガスの安全廃棄処理装置を試作した。その他、活性炭吸着能を判定する警報器の取り付け、活性炭のカートリッジ方式の創案、また燻蒸剤気化器の改良も試みた。(門倉)

以上のほか、他の研究機関の代表者による計画研究に参加したものの研究課題及び分担課題、分担者は次の如きものがある。

「金属製遺物の非破壊的方法による材質分析の原理的検討」代表者 京都大学文学部教授 樋口隆康

分担課題 金属のX線分析 (江本)

金属の放射化分析 (馬淵)

「遺構の埋蔵環境と劣化現象ならびに保存処理に関する研究」代表者 奈良国立文化財研究所 横山浩一

分担課題 埋蔵環境と劣化現象 (江本)

調査研究

「科学的方法による古彫刻の構造・材質・技法の研究」 代表者 東京国立文化財研究所 久野 健

分担課題 古彫刻の材質及び構造に関する研究 (石川)

3. 同位体分析による古文化財の研究 (一般研究(A) 代表者 馬淵久夫)

分担課題

試料蒐集(江本)

化学分析(見城・門倉)

従来、化学的手法による古文化財の産地推定には、成分元素の組成の変化が用いられてきた。鉛とストロンチウムは、天然放射性核種の影響を受けて産出地によって同位体比の変動が見られ産地推定の指標となり得る。最近著しく発達した質量分析計により、鉛やストロンチウムなど産地により同位体比の異なる元素の同位体組成を精密測定することにより産地推定が可能となる。

本研究では、金属器・ガラス・顔料等は鉛同位体で、土器・陶器・瓦等はストロンチウム同位体で推定しようとするものである。

試料として、中国青銅鏡破片、古銭(中国、朝鮮、日本銭)、土器、瓦等を入手し、これらについて、試料採取量及び、同位体比と組合せて考察・判断する元素パターンを得るため、主要成分元素の定量を行った。試料からの分離、精製に関しては陽イオン交換樹脂を用いる方法を確立した。

同位体比測定は、質量分析計が設置されて以来、標準試料を使って感度と精度のチェックを行っている。

4. 新しい赤外線工学による絵画の光学的研究 (奨励研究(A) 代表者 三浦定俊)

従来、絵画の光学的研究には赤外線フィルムが用いられてきたが、本研究は新しい赤外線 TV の利用と、得られた画像を改善するための画像処理技術の応用とを目的とした。

いままで用いられてきた赤外線フィルムは解像力の点で優れ、黒く汚れた墨書や、黄褐変した絹上の墨線などに対しては偉力を発揮する。しかし、山水画などで厚く塗られた緑青の下の墨線を見たい場合、赤外線フィルムでは検出できなかった。赤外線 TV は、やや長い波長の赤外線まで感じるのだからかなり明瞭に検出できる。ただ、写真に比べて解像力に難があり、そのまま資料として用いるには細い線の時など不適当

なことが多い。このためにTVの画像を一度普通写真に撮影して、得られたネガに画像処理を施してみた。「マスキング」によってある程度画像は改善されることがわかったが、欠点も多く、この点に関してはまだ研究すべき点が多い。

4 修復技術部

(1) 概 要

修復技術部は、文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究とその公表を主務とする部で、保存科学部が、主に文化財の保全にかかわる科学的分析研究をつかさどる部であるのに対し、修復技術部は、老化破損し、あるいは後世の付加物のある文化財について、もとの正しい状態に修理し、あるいは復元する方法についての科学的、技術的研究を担当している。

研究対象としては、絵画、書跡、彫刻、工芸品、考古資料などは勿論、木造建造物の組物や細部に描かれた絵、石造構築物などに及ぶ極めて広範囲の文化財があげられる。

研究組織としては、2研究室7研究員からなっている。

第一修復技術研究室

木材及び漆を主材料とする文化財の修復に関する科学的・技術的調査研究とその結果の公表を主務とするが、現在は石・金属その他無機材質のものも研究対象とされている。

将来第三研究室開設が可能になった場合は、そこで無機材質の文化財の研究が行われる予定である。

第二修復技術研究室

紙、繊維又は皮革を材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的研究とその結果の公表とを主務とする。

両研究室とも、経常的な研究として、有形文化財を構成している材料、構造、製作技法についての研究や、それらを修復するための伝統技術の整理体系化と科学的裏付

調査研究

けの資料集積、そして更に科学的な材料、技法の修復への応用と開発のための臨床的な研究などを実施しており、とくに材質強化、補強、接合、剥落防止、朽損部充填等について各種合成樹脂の応用と技法の開発に努めている。

これらの研究過程においては、保存科学部との共同研究が必要な部分もあり、また部内においても、一つの文化財が二つの研究室にまたがる複合的な材質からなる場合も多く、それらについては両研究室員による共同作業によって研究が進められている。これらの詳細は次項に記す通りである。

特別研究「軸装等の保存および修復技術に関する科学的研究」は3ヶ年の継続研究として最終年度を迎え、その成果は報告書「表具の科学」として公刊された。(IV事業1 出版(4)68頁参照)

受託研究は

- (1) 重文日光男体山頂出土鉄製品の修復処置研究
- (2) 国宝・重文日光社寺建造物の保存に関する研究(保存科学部と共同研究)
- (3) 県重文建暦寺菩薩面の修復処置法に関する研究
- (4) 重文大樹寺方丈障壁画彩色剥落止めの研究
- (5) 国宝北野天満宮本殿内部漆地板絵の修復処置の研究
- (6) 広島県平和記念資料館保管の被爆資料保存のための科学的研究(保存科学部と共同研究)

等を実施し成果を挙げた。

(2) 研究調査活動

A 一般研究

1. 伝統的製作技法及び修復技術の研究

修復技術部の経常的な研究主題の一つとして、伝統技法の調査研究がある。現在は彫刻(木彫像の木寄せ法、彩色技法、金銅仏鑄造技法)、工芸品(漆芸・木工芸技法)、絵画・書跡の装飾技法、出土金属工芸品の技法などを研究対象としている。これは作品がどのような材料を用い、どの様に造られているかについての実査を交えた資料蒐集分析、過去の修理記録及び実査データに基づく、修復技術の細部の分析を行い、これに科学技術がどの様に応用され得るかを明らかにしようとするものである。

(1) 彫刻の製作技法、修復に関する実査研究

本年度は、従来から実査した資料の整理図化分析を継続して行うと同時に、京都美術院国宝修理所の修理現場での技法実査、奈良法輪寺の重文木造十一面観音立像他約10件の平安木彫像の実査、資料蒐集を実施した。一方前年度に引き続き、金銅仏の作例として、東京国立博物館保管の重文丙寅銘弥勒半跏像、同辛亥銘菩薩立像のタガネ技術実査を行い、資料を整備した。(西川)

(2) 漆芸技法の研究

本年度は、中尊寺大長寿院蔵の国宝沃懸地螺鈿磐架・沃懸地螺鈿灯台を調査した。
(中里)

(3) 出土金属工芸品の製作技法の研究

本年度は、重要文化財・福岡県沖ノ島遺跡出土遺物一括および刀剣博物館所蔵の環頭大刀の実査を行い、製作技法資料を蒐集した。(青木)

(4) 装潢技法の研究

伝統技術の一つとしての装潢技法の資料蒐集と調査研究は、別項特別研究(48頁)により促進され、一部は、52年3月発行の「表具の科学」(特別研究報告)に発表した。また本年度も海外展(パリにおける唐招提寺展)の出品物につき、文化庁に協力して、保存のため、一部糊さし、繕いなどの修復処置を実施した。(増田)

2. 合成樹脂による彩色剥落止め技法の研究と実施

本年度の剥落止めの研究は、従来から困難視されていた漆塗りの剥離に対する接着に重点を置き、浸透性のよい水溶性アクリル樹脂(バインダー18)等と流動性のない揺変エマルジョン等の適用を検討した。そして受託研究の北野天満宮本殿板絵の処置他同じく建暦寺蔵菩薩面の処置に使用し、ほぼ期待どおりの成果を得た。(樋口)(C受託研究49頁参照)

3. 木造文化財の合成樹脂による修復の研究

(1) 人工木材に関する基礎的研究

アラルダイト XN 1023 (エポキシ樹脂+ガラスマイクロバルーン) は、SV 426 (エポキシ樹脂+フェノール樹脂マイクロバルーン) に比べて吸水性が小さく、耐久性が優れていると考えられる。この XN 1023 について、圧縮、剪断、曲げ、引張等の試験を行い、接着力、接着耐久性、機械的強度について検討した。耐候性については、手

調査研究

板に樹脂を盛付接着したもの、及び、手板にわざと欠損部を作り、そこに樹脂を充填したものを試料とし、屋外曝露及びウェザーメーター処理による試験を続行中であり、現在までの所、屋外曝露半年、ウェザーメーター処理1,500時間でほとんど変化は見られない。(西浦)

(2) 合成樹脂による建築構造材の修復技術の研究

重文平山家住宅(群馬県)の中引梁の修復処置の指導を行った。この梁は構造的役割が大きく、又意匠的にも重要なものであるが、内部が腐朽して空洞化していた。処置は表皮の内側をFRPで強化しておき中心の空洞部に湾曲させた集成材を組み込み、表皮との間隙は発泡ウレタンで充填した。昭和49年の古河市中山家住宅の梁の修復の際は、空隙にエポキシ樹脂(アラルダイトSV426)を充填したが作業性が悪く、今回はこの点を改良したものである。(樋口)

重文茂木家住宅(群馬県富岡市)解体修理に伴い、墨書の認められる梁材が虫害・腐朽により再使用不可能のため取外し、イソシアネート系合成樹脂(PSNY-10)を含浸して全体を強化し、剝離小片は、繊維素系合成樹脂(セメダインC)で接着した。(茂木)

4. 石造文化財の修復処置法に関する研究

(1) 大分県豊後高田市、特別史跡重文熊野磨崖仏を美術院国宝修理所が修復するについて、合成樹脂による強化処置法を指導した。

石表面の脆弱化した部分の強化には最近開発された新型のアルコキシルアルキルシリケート系強化剤を含浸させ、亀裂には当研究所で試作したギヤーポンプ式樹脂注入機を用いてエポキシ樹脂を注入充填し、更に表面全体に石材の呼吸を阻害しないで、かつ比較的耐久性のあるシリコン系撥水剤を散布し防水効果をあげ、石質の風化を防止する様な処置を施こした。(樋口)

(2) 樹脂含浸強化処置に関する基礎的研究

劣化脆弱化した石材を固定強化する為の含浸用樹脂について、浸透性、固定強化力、耐久性、文化財への適応性を各種試験により検討した結果、エチルシリケート系バインダー(SS-101)が極立って優秀であることが判った。又、樹脂処理後、表面にシリコン系の撥水剤を塗付することが非常に有効であることが判った。(西浦)

5. 出土遺物の修復技術研究

(1) 本年度は東京国立博物館保管、山梨県大丸山古墳出土鉄製品一括、福井県吉井町出土短甲、奈良県墓山古墳出土冑など7件の鉄製遺物の処置を行った。

鉄製品の修理は年々新しい工夫が加えられ、修復技術として確立されつつある。

過去においてパラフィンを用いて修理を行った遺物が多い。遺物を痛めることなくパラフィンを除去するのはむずかしいが、本年は珪藻土をポリビニルアルコールで練って、遺物に塗り、105°Cで熱してパラフィンを吸着させる方法を確立した。

青銅製品の腐食については、従来あまり問題にされていなかったが、近年出土例が増加するにつれ、ブロンズ病による腐食破損が無視できなくなってきた。そこで本年は、欧米で実施されている、ベンゾトリアゾール法、セスキカーボネイト法、電気分解法などについて新しい銅板にブロンズ病を発生させた試験体を使って追試実験を行った。(樋口・青木)

(2) 出土漆芸品の保存に関する科学的研究

出土した漆芸品は木部が腐朽して漆膜のみで残存する例が多いが、この様な漆膜を保存する為の修復技術の開発を実験施工した。

遺物は東京都文京区動坂遺跡出土の朱盃(江戸時代)と山形大学より依頼された縄文時代漆膜の二点がある。まず前者についてはPEG含浸後、漆下地を取除いておき、復元した木部にこれを貼付ける方法を試みている。後者は泥に埋まっていて形状が確かめられないために、回りの泥ごとPEGで固め、処理後外側の余分の泥を除去して修復する方法を検討中である。これらの方法の成果をもとに、来年度の受託研究予定の仙台市伊達政宗霊廟出土遺品の内キセル箱の修復を計画している。(中里)

6. 特別史蹟・国宝高松塚古墳壁画修理事業への協力

文化庁直営工事として、51年8月から52年2月迄7カ月間行われた壁画修理事業に伴う、修復技術部の協力要項は下記の通りであった。

- (1) 石室出入口(盗掘口)の閉塞ブロックの設計と材質検討(西川・樋口)
- (2) 修理用合成樹脂に関する検討(樋口)
- (3) 修復処置の実施協力(増田)

又、51年11月13日、奈良飛鳥資料館で行われた壁画修復委員会には、西川・樋口・増田が出席した。なお、増田は文化庁併任職員として、全期間、修復処置に協力した。

調査研究

B 特別研究

軸装等の保存および修復技術に関する科学研究

掛軸・巻物仕立ての文化財は古来より伝えられた極めて高度の装潢技術によって修復、製作されて来たが、その工程細部についての分析研究は今日まで為された事がない。この研究の目的はその様な装潢技術の材料と技術について基礎的・科学的裏付けを行うと共に、標準的な工程記録を製作し、又保存箱（桐箱）の科学的な効果を確かめるなど保存環境についての検討を加え、更に新技術応用の一環としての漉嵌め機の研究をも行って、軸装文化財の保存に寄与しようとするものである。

本年度は最終年度にあたり、12項目にわたる2年間の実験データ、調査記録の整理解析を行いその報告書「表具の科学」を刊行した。（IV事業1 出版(4)68頁参照）

C 受託研究

1. 重要文化財・下野国男体山頂出土金属製品保存修理処置の研究（栃木）

この物件は、二荒山神社所蔵のもので、国庫補助事業として、修理が行われるが、文化庁の要請にもとづき、当部がその修復を行うこととなった。防錆アクリルエマルジョンによる減圧含浸強化処置、合成樹脂による欠失部の修復など、従来からの安定した技法によって行われるが、本年度はその初年度で、約200点の鉄製品を対象とした。

2. 国宝・重文日光社寺建造物の保存に関する研究（保存科学部と共同研究、38頁参照）（栃木）

新旧彩色及び塗漆の現況調査（西川・中里）

3. 県重文・建曆寺菩薩面の修復処置法に関する研究（千葉）

千葉県君津市建曆寺蔵の菩薩面四面で、鎌倉時代の製作と考えられるものである。この内の一面は左半面のみのもので彩色はすでになく、やや厚手で他の三面とは製作が異なる。

残り三面の現状はほぼ同様で、いずれも割損があり、一部欠損するが、以前に漆及び合成樹脂で修理が行われている。面表の金泥塗りはすでにかかりの面積が剥落しているが、残存部分も下塗りから剥離している所が多く、又面裏の当初と思われる塗漆も漆下地からの剥落が進んでおり、残存部分もひどい剥離を生じて危険な状態にある。

この様な現状に対し処置は、まず面表の金泥層に対しては水溶性アクリル樹脂（バ

インダー18) のアルコール添加液により剥落止めを行い、一部にアクリル樹脂 (バラロイドB72) 溶液も併用した。

面裏の塗漆に対してはバラロイドB72溶液注入後、揺変エマルジョンによって接着した。一部にはアクリル樹脂ヒドロゾルも試用した。修理してある割損部は一部喰い違いが見られたので取はずし、麦漆及び揺変エマルジョンで付け直した。空隙部には木屑をつめた。面裏の塗漆剥落部分には薄く漆下地をつけて平滑とし、全体にすり漆した。

なお金泥部分はキノブチルアミンの稀薄水溶液によってクリーニングを行った。

4. 大樹寺方丈重文障壁画彩色剥落止めの研究 (愛知)

岡崎市大樹寺の新収蔵庫完成に伴い方丈障壁画は収蔵庫内に移しかえられる事となり、3カ年計画の国庫補助事業として遠藤工房がその修理施工を担当した。初年度の51年度は3日間、葺狩り間の障壁画11面と長押上の小壁12面計23面の貼かえ工事が行われた。この内受託研究の対象となったのは、装演技術による改装修理を行う前の彩色顔料の剥落止め処置の実施と指導である。

顔料の剥離は特定顔料に多く、胡粉、俗緒部分がひどい。予め胡粉塗りの手板を作り最適樹脂とその濃度を決め、水溶液アクリル樹脂 (バインダー18) の10%溶液にアルコールを適量添加したものをを用いて現地で処置した。絵をはがすにあたっては画面をレーヨンペーパーをふのりで貼って養生した。東京の遠藤工房アトリエに搬入後、施工中に剥離した顔料に対してはさらに剥落止めを行った。

特に顔料の反り返りの強い部分については感圧性接着剤 (アクリル系) を用いた。

5. 国宝・北野天満宮本殿内部漆地板絵の剥落止め処置の研究 (京都)

北野天満宮本殿は51年度の国庫補助事業として改装工事・彩色剥落止め工事等が行われたが、その工事の一部である本殿内部漆地の彩絵の修復処置には科学的な技術検討を必要としたため、受託研究として実施した。

本殿正面の両端柱間の漆地板壁に阿吽の唐獅子図が画かれており、この漆地の破損によって唐獅子図にもひどい損傷をあたえており、又彩色層自体にも剥離部分が多い。

処置はまず彩色層に対し水溶液アクリル樹脂 (バインダー18) の10%溶液を注入して接着し、更に表面に5% 溶液を塗布して顔料の脱落を防いだ。漆地剥離に対してはあらかじめバインダー18を注入しておき、後から揺変エマルジョンを入れて主に画紙

調査研究

をもって押えた。

この施工によって漆地の剥落止めに対する処置法の見通しがついた。

6. 広島平和記念資料館保管の被爆資料保存のための科学的調査研究（保存科学部と共同研究40頁参照）

この研究は50年度から継続して実施されたもので、①朽損した紙製品に対し、欧米式の合成樹脂フィルムによるラミネーション法の実験検討を続けたが、結論としては、元の紙の質感を損なわないで処理することがむづかしく、かえって有機ガラス板に透明シリコンをうすく流したもので両面から紙を挿み、保存する方法が最もよいことが確認された。②朽損した繊維製品を、密閉した有機ガラスケース内に納め、窒素ガスを封入して環境保持を計る方法は、本年度、ケースの密閉度の改良を行い、かつ、複数のケースをパイプで連結し、一方から窒素ガスを流し、各ケース内の環境を均一にする方法を実験検討し、メンテナンスの面からも、また経費の面からも実用化の見通しがついた。この研究は51年度で一応打切り、52年度以降、現地で実行に移される予定である。

D 科学研究費

古美術品、古建築の主要材料である木材及びその化粧材料、接着剤の劣化と修復処置の耐久性、強度に関する研究（特定研究（I） 代表者 西川杏太郎）

この研究の目的は古美術品、古建築等に用いられる木材とその表面に塗られる漆膜、彩色層の劣化変質現象及び木材の接着充填に用いる漆・膠等の伝統的材料や各種合成樹脂等化学的材料の強度耐久・耐候性、経年変化の実態を科学的に明らかにし、一方建造物の部材とその結合部の構造的強度、耐久性、経年変化の実態を検討し、併せて木造文化財の保存と修復技術の改良に役立たせるものである。

本年度は各種顔料の内、膠、合成樹脂、豆汁を膠着剤に丹・白土・胡粉の塗手板約100枚を製作し、ウェザーメーター、曝露試験によって耐久耐候試験を開始した。

また、建造物の継手仕口4種について5分の1の模型を66本製作し、強度試験を行った。

これらの結果は昭和52年1月27日～29日、奈良教育大学において行われた研究成果に関するシンポジウムで中間報告として発表された。

その内容は次の様なものである。

桧板上の丹塗、彩色下地としての胡粉、白土の耐久試験経過報告（西川杏太郎）

建築物修復用人工木材強度試験報告（樋口清治）

古建築の部材継手・仕口模型による強度試験準備及び経過報告（伊藤延男）

5 主要研究業績

①：著書 ②：論文 ③：解説 ④：研究発表
⑤：講演・放送 ⑥：その他
昭和51. 4～昭和52. 3

美術部

川上 涇（美術部長）

- | | | |
|----------------------------------|-------|------------|
| ① 中国の名画（鶴田武良と共著） | 世界文化社 | 52. 2 |
| ② 王鑑の画蹟（一） | 美術研究 | 304号 52. 3 |
| ③ G・B・サンソム著、福井利吉郎訳「日本文化史」について 解説 | 東京創元社 | 51. 11 |

関 千代（主任研究官）

- | | | |
|-----------|-----------------|---------------------|
| ② 松園の芸術 | 西宮市大谷美術館「松園展」目録 | 51. 4 |
| ③ 青邨の武者絵 | 武道 | 113～124 51. 4～52. 3 |
| ④ 近代の肖像画 | 美術部研究会 | 51. 11 |
| ⑤ 近代の肖像画 | 京都国立博物館夏期講座 | 51. 8 |
| ⑤ 松園の人と芸術 | 山種美術館 | 51. 10 |

田村 悦子（主任研究官）

- | | | |
|---------------|----------------|--------------|
| ① 三蹟一道風・佐理・行成 | 「日本の美術」122 至文堂 | 51. 7 |
| ③ 明治の書 | 日本の歴史 | 15 集英社 51. 6 |

柳沢 孝（主任研究官）

- | | | |
|-------------------------------|-------|-------------|
| ② 高松塚古墳壁画に関する二、三の新知見（秋山光和と共同） | 月刊文化財 | 154 51. 7 |
| ② 文保元年の軸銘ある新出両界曼荼羅図 | 仏教芸術 | 110号 51. 12 |
| ② 真言八祖行状図と廃寺永久寺真言堂障子絵（三） | 美術研究 | 304号 52. 3 |

調査研究

- ③ 一字金輪曼荼羅 日本経済新聞(美の美) 51. 8
- ④ 高松塚古墳壁画調査報告—双眼実体顕微鏡写真を中心として—
美術部研究会 51. 6
- ④ 十二世紀仏画の二潮流 美術史学会支部大会 51.10
- ④ 技法上よりみた古代日本絵画の問題点(秋山光和と共同研究)
科学研究費特定研究「古文化財」研究会 52. 1
- ④ 韓国古美術の調査報告 美術部研究会 52. 2

猪川 和子(主任研究官)

- ② 関東の鉄仏と丹党 史迹と美術 466号 51. 7
- ② 兵庫中山寺の十一面観音像 美術研究 303号 51.10
- ② 筑紫観世音寺観世音菩薩像考 仏教芸術 110号 51.12
- ④ 関東の鉄仏とその背景 美術部研究会 51. 6
- ⑤ 関東の鉄仏 東京都文化会館 51. 3

田実 栄子(主任研究官)

- ② 片倉家並びに日光東照宮伝来の小紋胴服二領について
美術研究 303号 51.10
- ② 新資料紀州東照宮の服飾類 上 —紀州東照宮服飾類調査報告1—
美術研究 306号 52. 3
- ④ 沖繩の染織について 美術部研究会 51. 7
- ④ 沖繩の縞と緋 美術部公開学術講座 51.11
- ⑤ 和服の色彩 色彩教育指導者研修会 52. 1
- ⑤ 型染について 文化財保存事業伝承者養成「型絵染」研修会 52. 2
- ⑤ 上杉謙信所用服飾類の色彩 塩沢織物デザイン改善研修会 52. 3

宮 次男(主任研究官)

- ② 平安絵巻の世界 言語生活 296 51. 5
- ② 歓喜天靈験記私考 美術研究 305号 52. 3

主要研究業績

- | | | |
|-------------------|-------------|-------|
| ② 鳳凰舞いおりて—平等院の美術— | 日本の美 1 | 51. 7 |
| ② 平治絵巻の諸問題 | 鑑賞日本古典文学 16 | 51. 9 |
| ② 説話と絵巻 | 文学 45—1 | 52. 1 |
| ④ 日本中世の肖像画 | 美術部研究会 | 51.10 |
| ④ 歓喜天靈験記について | 〃 | 51.12 |
| ⑤ 鎌倉時代の絵巻物 | 文化財修理技術者講習会 | 51. 9 |

陰里 鉄郎（主任研究官）

- | | | |
|-----------------------|-----------------|--------------|
| ① 青木繁 | 「巨匠の名画」10 学習研究社 | 51. 9 |
| ② 長崎洋風画 | 「江戸時代図誌」25 筑摩書房 | 51.10 |
| ② 川上冬崖の日本画 | 三彩 350号 | 51.10 |
| ② 亜欧堂田善 | 「近代日本美術史」1 有斐閣 | 52. 1 |
| ② フォンタネージと日本の弟子たち | 日伊文化研究 15号 | 52. 3 |
| ② 川原慶賀考 | 美術研究 306号 | 52. 3 |
| ③ 世界美術小辞典（明治以降・補遺） | 芸術新潮 319, 320号 | 51. 7, 51. 8 |
| ③ 現代人物事典 | 朝日新聞社 | 52. 3 |
| ⑤ 戦前の前衛美術 | 東京都美術館 | 51. 6 |
| ⑤ 日本の近代美術 | 鎌倉彫会館 | 51.12 |
| ⑥ モルス・シングル河畔にて（慶賀の調査） | 三彩 345号 | 51. 5 |

久野 健（第一研究室長）

- | | | |
|---------------|--------------------|-------|
| ① 日本の彫刻 | 世界文化社 | 51. 8 |
| ① 関東古寺の仏像 | 芸艸堂 | 51.11 |
| ② 久世庵寺出土の誕生仏 | 美術研究 304号 | 52. 3 |
| ④ パーミヤン東大仏と鎧石 | 美術部研究会 | 52. 1 |
| ④ 鎧石について | 科学研究費特定研究「古文化財」研究会 | 52. 1 |

関口 正之（第一研究室）

- | | | |
|------------------------|-----------|-------|
| ② 西明寺三重塔四天柱絵金剛界諸菩薩像—統一 | 美術研究 306号 | 52. 3 |
|------------------------|-----------|-------|

調査研究

- ④ 韓国古美術の調査 美術部研究会 52. 2
⑤ 仏涅槃図 美術部公開学術講座 51. 11

中村伝三郎（第二研究室長）

- ① 北村西望彫塑大成 中村伝三郎編 講談社 51. 6
① 荻原守衛とその周辺 「近代の美術」39 至文堂 52. 3
② 明治期の工芸・彫刻 「近代日本美術史」1 有斐閣 52. 1
③ 熊岡美彦——その回顧展の意義 茨城県立美術博物館・同回顧展図録 51. 5
③ 上社会五十周年展に寄せて 日動サロン・同展目録 51. 6
③ 佐々木大樹の人と作品 富山県民会館美術館・同彫刻回顧展図録 51. 9
⑥ 峯田義郎「風——私考」展に寄せる 東京高島屋・同彫刻個展目録 51. 5
⑥ 第10回記念・抒情派展に寄せる 資生堂ギャラリー・同展目録 51. 6
⑥ 桑原巨守の人と作品 日動画廊・同彫刻個展目録 51. 11
⑥ 蠟型鍍金・彫鍛金「宮田藍堂親子五人展」 新潟日報 51. 11
⑥ わが少年洋画家の頃（県内洋画壇回顧）
兵庫県立近代美術館ニュース21号 51. 9

上野 アキ（資料室長）

- ④ 朝鮮仏画の種々相 美術部研究会 51. 9

江上 綾（資料室）

- ② 直弧文鏡背文の源流について 日本美術工芸 456 51. 9

鶴田 武良（資料室）

- ① 吳昌碩（長尾正和共著） 講談社 51. 10
① 中国の名画（川上涇と共著） 世界文化社 52. 2
② 近百年來中国画人資料三 美術研究 303号 51. 10
④ 香港所在の現代中国絵画 美術部研究会 51. 7

河野 元昭(資料室)

- ① 尾形光琳 「日本美術絵画全集17」 集英社 51. 8
 ② 酒井抱一(画家の手紙5) 日本美術工芸 452 51. 5
 ② 尾形光琳筆躑躅図(複製解説) 講談社 51. 5
 ② 歌川広重筆京都名所之内 「広重北斎諸国名所絵集」 学研 51.11
 ② 葛飾北斎筆諸国名橋奇覧 「広重北斎諸国名所絵集」 学研 52. 2
 ③ デラックス・ギャラリー日本の美術Ⅱ図版解説 旺文社 51. 4
 ③ 光琳秋草模様 季刊アニメ 6 51. 8
 ⑤ 円山応挙「難福図巻」 TV 12 51.10

米倉 迪夫(資料室)

- ② 「藤原信実考」 美術研究 305号 52. 3
 ③ Book Review: Heian Temples—Byodo-in and Chuson-ji. Monumenta
 Nipponica Vol. 22-1, Spring 1977 (The Japan Times, April 25 1977 に転載)

芸 能 部

三隅 治雄(芸能部長)

- ① 芸能史の民俗的研究 東京堂出版 51. 9
 ① 日本祭祀研究集成3・4巻(岩崎敏夫・坪井洋文共編・著) 51.12, 52. 3
 ① 日本祭礼地図IV(宮本常一・榎本由喜雄・田原久・木下忠・原浩一共編・著)
 52. 3
 ② 民俗芸能研究の歴史 文学 52. 3
 ② 男芸と女芸—沖繩の舞踊技法の展開— 芸能の科学 8 52. 3
 ③ 女の芸能史 小原流挿花 310 51. 9
 ③ 子供の芸能史 小原流挿花
 ④ 南島芸能史 芸能部連続研究発表会 51. 7
 ④ 民俗芸能と「とこよ」 慶応義塾大学地人会 51.12
 ④ 「山家鳥虫歌」(仲井幸二郎・清崎敏郎・仲尾達郎・西村亨共同)
 芸能学会 51. 4~52. 3

調査研究

佐藤 道子 (演劇研究室)

- ① 東大寺修二会の構成と所作 中 芸能の科学 7 52. 3
④ 修二会の構成 平凡社カラー新書 59 52. 2

羽田 昶 (演劇研究室)

- ① 能・本説と展開 (共編著) 桜楓社 52. 3
② 世阿弥作品の鑑賞「井筒」 解釈と鑑賞 52. 2
③ 能と小野小町と 喜多流声の名曲集 51. 5
③ 近代観世流の芸系 コロムビア・レコード 52. 2
⑤ 青少年芸術劇場 能・狂言部門解説 銚子市青少年文化会館 51. 7
" 吾妻郡文化会館 51. 7
" 利根沼田文化会館 51. 7
⑤ 日本演劇史 (古代・中世) 劇団文学座 51. 5
⑥ 狂言と三島由紀夫 能楽資料センター紀要 No. 4 51. 10
⑥ 劇評・近代能楽集「綾鼓・卒塔婆小町・班女」 演劇界 51. 8
⑥ 能評・「武悪」「清経」そのほか 能楽タイムズ 51. 9
⑥ 劇評・「不知火検校」「鏡獅子」 演劇界 52. 3

松本 雍 (演劇研究室)

- ② 日本音楽の歴史をたどる—中世編3・4— 季刊邦楽 7号・8号 51. 4~51. 7
③ 能の囃子について 能楽鑑賞の栗 17号 52. 3
⑥ 能評・野宮の好演など 能楽タイムズ 51. 11

柿木 吾郎 (音楽舞踊研究室長)

- ① 「新音楽辞典・楽語」(共同執筆) 音楽之友社 52. 3
② 「大谷派の正信偈・念仏・和讃——その構成と音楽的分析」 芸能の科学 8 52. 3

横道萬里雄（音楽舞踊研究室）

- | | | |
|-----------------|------------|-------|
| ③ 秘密伝法灌頂会作法解説 | CBSソニーレコード | 51.11 |
| ⑤ 能の特質 | 東宮御所 | 51. 4 |
| ⑤ 日本の古典芸能 | 人事院 | 51. 5 |
| ⑤ 能の音楽 | 大阪能楽鑑賞会 | 51. 9 |
| ⑥ 能の再構成資料（能楽対談） | 能楽タイムズ | 51.10 |

古橋 宏子（音楽舞踊研究室）

- | | | |
|---|--------|-------|
| ④ 民族音楽学における音のデータの視覚化 transcription についての一考察 | | |
| | 東洋音楽学会 | 51. 6 |

中村 茂子（民俗芸能研究室）

- | | | |
|---------------|--------------|-------|
| ② 川と祭り | 自然と文化 76 夏季号 | 51. 6 |
| ② 奉納芸と余興芸 | 芸能の科学 8 | 52. 3 |
| ③ 春日大社の御巫舞と和舞 | 民俗芸能 57 | 51.10 |
| ③ 春日若宮の御祭り | 開所記念講演会 | 51.11 |

仲井幸二郎（民俗芸能研究室）

- | | | |
|---------------|----------------|-------|
| ② 類型の詞章 | 日本語講座第2巻 | 51.10 |
| ③ 「八王子の叟山祭」書評 | 芸能 18巻4号 | 51. 4 |
| ③ 民謡と歌謡曲 | 樞 17号 | 51. 7 |
| ③ 遠山の霜月祭 | 日本民俗学の視点第3巻 | 51.11 |
| ③ ほうほう螢こい | 三田評論 765号 | 51.12 |
| ④ 山家鳥虫歌 | 芸能 51. 4~52. 3 | |
| ⑤ 民謡の知識 | 日本民謡協会 | 51. 9 |
| ⑤ 語りの民俗 | 芸能部公開学術講座 | 51.12 |

保存科学部

江本 義理（保存科学部長）

調査研究

- ② 彩色顔料の分析(分担) 田代太田古墳調査及び保存工事報告書 51.10
- ② 土壙墓出土のガラス玉の材質について(分担)
—福岡県鞍手郡鞍手町所在高木遺跡の調査—
九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告ⅩⅢ 51. 2
- ② けい光X線分析による土器・瓦中の鉄, ルビジウム, ストロントニウム, イットリウム, ジルコニウムの定量(馬淵久夫と共著) 保存科学 16号 52. 3
- ② A Mössbauer Study of Ancient Japanese Artifacts. (T. Tominaga, M. Takeda, H. Mabuchi)
Radiochem. Radioanal. Letters 28(3) 221-230 (1977)
- ③ 古文化財の材質と技法—鑑定例を中心に 化学と工業 29巻 12号 51.12
- ④ メスbauer分光法の考古学への応用(第1報)(富永・竹田・岸本・馬淵共同) 第20回放射化学討論会 51.10
- ④ メスbauer分光法の考古学への応用(第2報)(竹田・安立・馬淵・富永共同) 日本分析化学会第25年会 51.10
- ④ 考古学試料の分析化学Ⅰ 瓦及び土器中のFe, Rb, Sr, Y, Zrのけい光X線分析(馬淵共同) 日本分析化学会第25年会 51.10
- ④ 施設的环境とコンクリート及び内装材の文化財への影響
科学研究費特定研究「古文化財」研究会 52. 1
- ⑤ 美術工芸品の環境 文化財管理研究協議会(文化庁) 51. 5
- ⑤ 保存科学概論
奈文埋蔵文化財発掘技術者専門研修会(遺物整理課程) 51.10
- ⑤ 文化財の保存環境 文化財保存に関する講演会(九州歴史資料館) 51.11

見城 敏子(主任研究官)

- ② 漆塗膜に関する研究(第6報)[漆に大豆油, アマニ油, 日本産キリ油添加の影響] 色材協会誌 Vol. 49 51.10
- ② 漆塗膜に関する研究(第7報)[漆塗膜の硬化に及ぼす油変性アルキド樹脂の影響] 色材協会誌 Vol. 49 51.10
- ② 漆塗膜に関する研究(第8報)[日本, タイ, ビルマ, 台湾産漆の塗膜硬

- 化とその性状について] 色材協会誌 Vol. 49 51. 11
- ② 漆液と漆塗膜 塗装技術 15巻, 11号 51. 10
- ② 漆と乾性油との相互作用 保存科学 16号 52. 3
- ② 裏打に伴うかさ比容変化と裏打用和紙の伸縮
表具の科学(特別研究報告書) 52. 3
- ④ 環境汚染の材質への影響 第6回文化財保存修復研究協議会 52. 3
- ④ 文化財材質に及ぼす薬剤の影響の検討
科学研究費特定研究「古文化財」研究会 52. 1

馬淵 久夫(化学研究室長)

- ① 粒子の判定
日本化学会編新基礎シリーズ測定法の基礎 I (大日本図書) 51. 10
- ② 和紙の中の微量元素 表具の科学(特別研究報告書) 52. 3
- ② けい光X線分析による土器, 瓦中の鉄, ルビジウム, ストロンチウム, イ
ットリウム, ジルコニウムの定量(江本義理と共著) 保存科学 16号 52. 3
- ② 中性子放射化分析による土器・瓦の主成分元素の定量(野津憲治と共著)
保存科学 16号 52. 3
- ② A Mössbauer Study of Ancient Japanese Artifacts. (T. Tominaga, M.
Takeda, Y. Emoto) Radiochem. Radionucl. Letters 28(3) 221-230 (1977)
- ③ ^{93}Nb の半減期と天然における存在 化学 31巻6号 51. 6
- ③ 科学的方法による古文化財研究の可能性スチール・デザイン 159号 51. 8
- ③ 元素はいつ生まれたか 現代化学 65号 51. 8
- ③ 宇宙物質の化学分析進歩総説(野津憲治共著) ぶんせき 8号 51. 8
- ③ 鉄の謎・鉄の不思議 鉄 1977・1号 52. 1
- ③ 超重金属は発見されたのか 化学 32巻2号 52. 2
- ④ メスバウワー分光法の考古学への応用(第1報)(富田・竹田・岸本・江
本共同) 第20回放射化学討論会 51. 10
- ④ メスバウワー分光法の考古学への応用(第2報)(竹田・安立・江本・富
永共同) 日本分析化学会第25年会 51. 10

調査研究

- ④ 考古学試料の分析化学 I 瓦及び土器中の Fe, Rb, Sr, Y, Zr のけい光 X線分析 (江本共同) 日本分析化学会第25年会 51. 10
- ④ 金属製造物(青銅)の分析法の検討 科学研究費特定研究「古文化財」研究会 52. 1
- ④ 同位体比の古文化財への利用 日本質量分析学会同位体比部会 52. 2

門倉 武夫 (化学研究室)

- ② 重要文化財閑谷学校聖廟大成殿及び閑谷神社の被覆燻蒸 (森八郎と共著) 慶大日吉論文集・自然科学編 13号 51. 4
- ② 表具用裏打紙の走査電子顕微鏡による撮影 表具の科学 (特別研究報告書) 52. 3
- ④ 保存環境として見た古墳石室内の空気 第6回文化財保存修復研究協議会 51. 10
- ④ 燻蒸剤の気化促進と残留ガスの安全廃棄法の改善 科学研究費特定研究「古文化財」研究会 52. 1

石川 陸郎 (物理研究室)

- ② 表具における紙の接着断面の光学顕微鏡による観察 表具の科学 (特別研究報告書) 52. 3
- ② 四川・雲南の剣をめぐる一構造と材質調査一 ミュージアム No. 312 52. 3
- ④ 施設内環境の現状 第6回文化財保存修復研究協議会 51. 10
- ④ 東京国立博物館法隆寺宝物館の鎧石香炉の X線透過撮影について 科学研究費特定研究「古文化財」研究会 52. 1

三浦 定俊 (物理研究室)

- ② 保存箱内の温湿度変化 表具の科学 (特別研究報告書) 52. 3
- ② 保存箱内の温湿度変動 日本建築学会大会学術講演集 51. 10
- ④ 古墳石室内の温湿度変化について 第6回文化財保存修復研究協議会 51. 10

新井 英夫 (生物研究室長)

- ① 古墳の微生物学的問題について
 ー微生物の生態第4集場の管理をめぐってー 東京大学出版会 52. 1
- ① 微生物による生物実験 (高井・駒形・村杉・山極共著) 三省堂 52. 1
- ② 防虫防黴剤の薬効と材質への影響
 表具の科学 (特別研究報告書) (森八郎と共著) 52. 3
- ④ 国外における文化財の保存 第34回資源微生物研究会 52. 3

森 八郎 (生物研究室)

- ② 重要文化財閑谷学校聖廟大成殿と閑谷神社の被覆燻蒸 (門倉武夫と共著)
 慶大日吉論文集自然科学編 13号 51. 4
- ② わが国に生息する“住まいの害虫”リスト〔I〕種類 (和名と学名)
 しろあり 26号 51. 8
- ② わが国に生息するヒラタキクイムシ科 Lyctidae の害虫とヒラタキクイムシの Mass Culture について
 木材保存 5号 51. 9
- ② わが国に生息する“住まいの害虫”リスト〔II〕各論
 1. 等翅目 2. 鞘翅目 しろあり 27号 51. 12
- ② 速報〔I〕アメリカ乾材シロアリ東京都内に定着
 〔II〕秦野市に発生したイエシロアリの巢の発掘 同 上 51. 12
- ② 博物館につく虫 自然科学と博物館 51. 12
- ② 関東地方およびその近県におけるシロアリ事情 しろあり 28号 52. 3
- ② 和紙と虫害 表具の科学 (特別研究報告書) 52. 3
- ② 防虫防黴剤の薬効と材質への影響 (新井英夫と共著)
 表具の科学 (特別研究報告書) 52. 3
- ④ わが国における最近のシロアリ分布 (第6報)
 日本昆虫学会関東支部大会 51. 12
- ④ 文化財の虫黴害防除法の開発
 科学研究費特定研究「古文化財」研究会 52. 1
- ⑥ シロアリ防除施工講習会講演 (社)日本しろあり対策協会講習会 51. 4

調査研究

- ⑤ シロアリ NHK TV 51. 6
- ⑤ ヒラタキタイムシ (ごぞんじですか) 51. 7
- ⑤ シロアリ燻蒸実務講習会講演 (社)日本しろあり対策協会講習会 51. 9
- ⑤ 建築物の虫害 しろあり対策ゼミナール (日本しろあり対策協会) 51. 9
- ⑤ 古文化財の虫害とその保存科学 沖縄県庁 52. 1
- ⑤ シロアリ防除施工講習会講演 (社)日本しろあり対策協会講習会 52. 1
- ⑤ シロアリ 関東PCO協会講習会 52. 2
- ⑤ ヒラタキタイムシの生態 児玉グループ研究会講演 52. 2
- ⑤ シロアリ 厚生省研修会講演 52. 3
- ⑤ シロアリ (社)日本環境衛生センター講習会講演 52. 3

修復技術部

西川杏太郎 (修復技術部長)

- ① 頂相彫刻 (日本の美術 123) 至文堂 51. 8
- ① 文化財講座, 日本の美術 7, 彫刻 (鎌倉) 第一法規 52. 2
- ② 津市愛宕山古墳から出土した押出仏 仏教芸術 108号 51. 7
- ② 東大医学部蔵人頭模造の製作技法調査と修復処置 (中里寿克と共著)
保存科学 16号 52. 3
- ② 研究概要 表具の科学 (特別研究報告書) 52. 3
- ② 表具技術の記録 (増田勝彦と共著) 同上 52. 3
- ③ 伝統技術と科学の間 自然 371号 中央公論 51.10
- ⑤ 史料取扱いの科学 国立史料館近世史料取扱講習会 51.10

中里 寿克 (主任研究官)

- ② 国宝北野天満宮本殿漆地彩絵の保存について (樋口清治と共著)
(受託研究報告42号) 保存科学 16号 52. 3
- ② 東大医学部蔵木造人頭模型の製作技法調査と修復処置 (西川杏太郎と共著)
保存科学 16号 52. 3
- ② 平安時代漆芸技法資料VI 保存科学 16号 52. 3

青木 繁夫（第一修復技術研究室）

- ② 原1号墳出土鉄器の保存修復処置について
常陸浮島古墳群 浮島研究会 51. 9
- ② 史跡羽山装飾古墳天井崩壊部の修復について（樋口清治と共著）
（受託研究報告41号） 保存科学 16号 52. 3

西浦 忠輝（第一修復技術研究室）

- ② 石造文化財の修復処置に関する研究〔1〕—樹脂強化処理石材の耐久性—
保存科学 16号 52. 3
- ② 打刷毛による接着促進効果 表具の科学（特別研究報告書） 52. 3
- ② 表具用の化学糊について（樋口清治と共著） 同上 52. 3
- ② 電子線による補修用絹の劣化促進処理（樋口清治と共著） 同上 52. 3

茂木 曙（第一修復技術研究室）

- ② 所沢市熊野神社板碑の修復処置 保存科学 16号 52. 3

樋口 清治（第二修復技術研究室長）

- ① 保存科学と建造物修理 文化財講座 日本の建築5 第一法規 51. 10
- ② 史跡羽山装飾古墳天井崩壊部の修復について（青木繁夫と共著）
（受託研究報告41号） 保存科学 16号 52. 3
- ② 国宝北野天満宮本殿板絵彩色の保存について（中里寿克と共著）
（受託研究報告42号） 保存科学 16号 52. 3
- ② 表具用の化学糊について（西浦忠輝と共著）
表具の科学（特別研究報告書） 52. 3
- ② 電子線による補修用絹の劣化促進処理（西浦忠輝と共著） 同上 52. 3
- ③ 石造文化財の保存と修理 月刊文化財 161号 52. 2
- ④ 丹彩色の耐久性と人工木材の強度と耐久性について
科学研究費特定研究「古文化財」研究会 52. 1
- ⑤ 文化財と合成樹脂 開所記念講演会 51. 10

調査研究

- ⑤ 保存科学における合成樹脂の沿革と現状
51年度奈文研埋蔵文化財発掘技術者専門研修会 51. 11
- ⑤ 遺物の科学処置について 神奈川県埋蔵文化財取扱い研修会 52. 3

増田 勝彦(第二修復技術研究室)

- ② 表具技術の記録(西川杏太郎と共著) 表具の科学(特別研究報告書) 52. 3
- ② 漉嵌機の和紙修理への応用(速報Ⅱ) 同上 52. 3
- ③ ローマセンター壁画修復コースに参加して 保存科学 16号 52. 3

6 その他の研究活動

ほかの機関における講義

(氏名)	(機関名)	(期間)	(担当科目)
川上 涇	青山学院大学文学部非常勤講師	(51. 4. 1~52. 3. 31)	東洋美術史
上野 アキ	聖心女子大学非常勤講師	(51. 4. 1~52. 3. 31)	東洋美術史
田村 悦子	青山学院大学非常勤講師	(51. 4. 1~52. 3. 31)	美術
猪川 和子	帝京大学文学部非常勤講師	(51. 4. 1~52. 3. 31)	日本美術史
田実 栄子	お茶の水女子大学家政学部非常勤講師	(51. 4. 1~51. 10. 20)	服飾史
宮 次男	青山学院大学非常勤講師	(50. 4. 1~51. 3. 31)	美術
江上 綏	埼玉大学教養学部非常勤講師	(51. 4. 1~52. 3. 31)	日本の芸術
関口 正之	千葉工業大学非常勤講師	(51. 4. 1~52. 3. 31)	文芸学
鶴田 武良	成蹊大学経済学部文学部非常勤講師	(51. 4. 1~52. 3. 31)	美術
河野 元昭	東海大学教養学部非常勤講師	(51. 4. 1~52. 3. 31)	外書研究, 特論
江本 義理	東京芸術大学美術学部非常勤講師	(51. 10. 1~52. 3. 31)	保存科学
馬淵 久夫	東京大学工学部非常勤講師	(51. 6. 1~52. 3. 31)	放射化学
西川杏太郎	東京芸術大学美術学部非常勤講師	(51. 10. 1~52. 3. 31)	修復技術史

7 学位授与

本研究所職員で学位を授与された者は次のとおりである。

種 別	授与大学	授与年月日	官 職	氏 名
文学博士	国学院大学	51. 3. 16	文部技官, 芸能部長	三隅 治雄
文学博士	東京大学	51. 6. 14	文部技官, 美術部第一研究室 長	久野 健

Ⅵ 事 業

1 出 版

(1) 美術研究

昭和7年1月創刊，当研究所美術部の調査研究の成果を公表するための機関誌であつて，主として所属研究員の執筆にかかる論文・研究資料・図版解説・美術関係文献の校刊等を掲載し，ときには所外研究者の寄稿を受けることもある。A4版，各号本文40頁，原色図版1，単色図版8，各年度6冊刊行している。ただし本年度は出版費不足のため4冊を刊行した。

昭和50年度（第303号～第304号）昭和51年度（第305号～第306号）「美術研究」所載の論説等の題目は次のとおりである。

美術研究 303号 昭和51年10月 発行

<論説>

兵庫中山寺の十一面観音像 猪川 和子

片倉家並びに日光・東照宮伝来の小紋胴服二領について 神谷 榮子

<研究資料>

近百年來中国画人資料三 鶴田 武良

美術研究 304号 昭和52年3月 発行

<論説>

王鑑の画蹟（一） 川上 涇

真言八祖行状図と廃寺永久寺真言堂障子絵（三） 柳澤 孝

<図版解説>

久世廃寺址出土の誕生仏 久野 健

美術研究 305号 昭和52年3月 発行

<論説>

歓喜天靈驗記私考 宮 次男

藤原信実考 米倉 迪夫

<研究資料>

- 白描絵入本『源氏物語』（早蕨）の詞書断簡 秋山 光和
美術研究 306号 昭和52年3月 発行

<論説>

- 川原慶賀考（一） 陰里 鉄郎
西明寺三重塔四天王柱絵金剛界諸菩薩像（続） 関口 正之
新資料紀州東照宮の服飾類（上）
—紀州東照宮の服飾類調査報告（一）— 神谷 榮子

(2) 芸能の科学

芸能の科学 7（芸能調査録Ⅱ）

過去10年余にわたって、芸能部が継続的に行った“東大寺修二会”に関する研究調査の成果の一部を、「東大寺修二会の構成と所作」（中）と題して昭和52年3月に刊行した。

これは、毎年2月末から一箇月近い日数を費して、大規模な構成と多彩な内容を展開する“東大寺修二会”の現状を、客観的に把握し、学術的な見地から再構成・記録したもので、今後の修二会研究の基礎資料となるものである。210コマの写真と70余の図をも用いて、行事の内容を可能な限り細かく記述した。

（中）の巻には、（上）の巻に引き続く夜間の諸作法——走り・後夜の勤行・達陀・晨朝の勤行——を収めてある。

芸能の科学 8（芸能論考Ⅲ）

本年度は芸能論考集として、下記の諸論文を収録し、刊行した。

- 大谷派の正信偈・念仏・和讃 —その構成と音楽的分析— 柿木 吾郎
奉納芸と余興芸 —地方定着の大神楽— 中村 茂子
男芸と女芸 —沖繩における舞踊伎法の展開— 三隅 治雄
語りの民俗 仲井 幸二郎

(3) 保存科学

昭和39年3月創刊の保存科学部・修復技術部の機関誌で、年1回の刊行で今までに

事 業

第15号まで発行、内容は所属研究員による文化財の保存と修復に関する科学的調査、研究、受託研究報告等の論文・報告等である。

保存科学第16号 昭和52年3月発行

- (1) 蛍光X線分析による土器・瓦中の鉄・ルビジウム・ストロンチウム・イットリウム・ジルコニウムの定量 馬淵久夫・江本義理
- (2) 中性子放射化分析による土器・瓦の主成分元素の定量 馬淵久夫・野津憲治
- (3) 漆と乾性油との相互作用 見城 敏子
- (4) 石造文化財の修復処置に関する研究〔I〕 西浦 忠輝
- (5) 所沢市熊野神社板碑の修復処置 茂木 曙
- (6) 平安時代漆芸技法資料VI 中里 寿克
- (7) 東大医学部蔵人頭模型の製作技法調査と修復処置 西川杏太郎・中里寿克
- (8) 史跡羽山装飾古墳天井崩壊部の修復について
受託研究報告41号 樋口清治・青木繁夫
- (9) 国宝北野天満宮本殿漆地彩絵の保存について
受託研究報告42号 樋口清治・中里寿克
- (10) ローマセンター壁画修復コースに参加して 増田 勝彦

(4) 表具の科学 昭和52年3月発行

一特別研究・軸装等の保存および修復技術に関する科学的研究報告書一

目 次

- 第一章 研究概要 西川杏太郎
- 第二章 表具技術の記録 増田勝彦・西川杏太郎
 1. A 工 具
 2. B 材 料
 3. 表具の工程
 - C 新しく表具を行う場合
 - D 表具修理の場合
- 第三章 表具材料と技術に関する研究
 1. 和紙の中の微量元素 馬淵 久夫

- | | |
|----------------------------|-----------|
| 2. 表具用裏打紙の走査型電子顕微鏡による観察 | 門倉 武夫 |
| 3. 表具における紙の接着断面の光学顕微鏡による観察 | 石川 陸郎 |
| 4. 裏打に伴うかさ比容変化と裏打用和紙の伸縮 | 見城 敏子 |
| 5. 打刷毛による接着促進効果 | 西浦 忠輝 |
| 6. 表具用の化学糊について | 樋口清治・西浦忠輝 |

第四章 軸装作品の保存修復に関する研究

- | | |
|----------------------|------------------------|
| 1. 日本画中における力学的諸現象 | 登石 健三 |
| 2. 保存箱内の温湿度変化 | 三浦 定俊 |
| 3. 和紙と虫害 | 森 八郎 |
| 4. 防虫防霉剤の薬効と材質への影響 | 森 八郎・新井英夫 |
| 5. 漉嵌機の和紙修理への応用(速報Ⅱ) | 増田 勝彦 |
| 6. 電子線による補修用絹の劣化促進処理 | 樋口清治・西浦忠輝
国宝修理装潢師連盟 |

(5) その他の出版物

美術部

支那古版画図録	(美術研究資料第1輯)	昭和7
吉備大臣入唐絵詞	(美術研究資料第2輯)	昭和9
徽宗摹張萱搗練図	(美術研究資料第3輯)	昭和10
鳳凰堂雲中供養仏	(美術研究資料第4輯)	昭和11
桃山時代金碧障壁画	(美術研究資料第5輯)	昭和12
富貴寺壁画	(美術研究資料第6輯)	昭和13
印度及南部アジア美術資料	(美術研究資料第7輯)	昭和14
光悦色紙帖	(美術研究資料第8輯)	昭和14
菱田春草	(美術研究資料第9輯)	昭和15
能恵法師絵詞	(美術研究資料第10輯)	昭和16
宮素然筆明妃出塞図巻	(美術研究資料第11輯)	昭和16
日本美術資料	第1輯	昭和13
日本美術資料	第2輯	昭和14

事 業

日本美術資料		第3輯	昭和15
日本美術資料		第4輯	昭和16
日本美術資料		第5輯	昭和17
近代日本美術資料		第1輯	昭和23
近代日本美術資料		第2輯	昭和24
近代日本美術資料		第3輯	昭和26
墨跡資料集		第1輯	昭和24
墨跡資料集		第2輯	昭和24
墨跡資料集		第3輯	昭和26
源氏物語絵巻			昭和24
黒田清輝素描集			昭和24
栄山寺八角堂			昭和25
栄山寺八角堂の研究			昭和26
法隆寺金堂建築及び壁画の文様研究			昭和28
黒田清輝作品集			昭和29
高雄曼荼羅			昭和41
明治美術基礎資料集			昭和50
東洋美術文献目録	明治以降昭和10年まで		昭和16
東洋美術文献目録続編	昭和11年～同20年		昭和23
東洋古美術文献目録	昭和21年～同25年		昭和29
美術研究索引	第1号～第100号		昭和16
美術研究総目録	第1号～第230号		昭和40
東洋美術文献目録	明治以降昭和10年まで(再刊)		昭和42
日本東洋古美術文献目録	昭和11年～同40年		昭和44

ほかに科学研究費補助金(研究成果刊行費)の交付を受け、または本研究所の監修で刊行された図書は次のとおりである。

光学的方法による古美術品の研究

東京国立文化財研究所光学研究班編	吉川弘文館	昭和30
梁楷	美術研究所編 便利堂	昭和32

醍醐寺五重塔の壁画	高田 修編	吉川弘文館	昭和34
平安時代世俗画の研究	秋山光和著	吉川弘文館	昭和39
近代日本美術の研究	隈元謙次郎著	大蔵省印刷局	昭和39
黒田清輝	隈元謙次郎著	日本経済新聞社	昭和41
扇面法華経	秋山光和 柳沢 孝著 鈴木敬三	鹿島出版会	昭和47
金字宝塔曼陀羅	宮 次男著	吉川弘文館	昭和50

芸 能 部

標準日本舞踊譜			昭和35
音盤目録 I			昭和40
芸能の科学 1	—芸能資料集 1—四世鶴屋南北作者年表		昭和41
芸能の科学 2	—芸能資料集 2—鮫の神楽台本集成		昭和41
音盤目録 II			昭和45
東大寺修二会	観音悔過(お水取り)		
	東京国立文化財研究所芸能部監修	ビクターレコード	昭和46
芸能の科学 3	—芸能論考 I		
	東京国立文化財研究所芸能部編	平凡社	昭和47
芸能の科学 4	—芸能資料集 III		
	東京国立文化財研究所芸能部編	平凡社	昭和48
芸能の科学 5	—芸能論考 II		
	東京国立文化財研究所芸能部編	平凡社	昭和49
芸能の科学 6	—芸能調査録 I「東大寺修二会の構成と所作」(上)		
	東京国立文化財研究所芸能部編	平凡社	昭和50

保存科学部 (受託研究報告)

重要文化財円成寺本堂内陣彩色剝落どめ他18件			昭和35~昭和42
------------------------	--	--	-----------

事 業

2 開所記念行事

開所記念講演会

日 時 昭和51年11月20日（土） 13：30～16：00

会 場 東京国立博物館講堂

講 演 (1)中国の山水画 美術部長 川上 涇

(2)文化財と合成樹脂 修復技術部

第二修復技術研究室長 樋口 清治

映 画 春日若宮の御祭り

(解説) 芸能部民俗芸能研究室 中村 茂子

(1) 中国の山水画 川上 涇

東アジアにおいて自律的に展開した中国絵画は、長い歴史と一貫した伝統を有するとともに、他の文化圏の絵画には見られぬ特色を持つ。世界の多くの国々の絵画が、宗教的題材に覆われ、人物表現を主とする時期が永かったのに対して、中国人はいち早く画材を自然に求めた。山水画は自然の真実を写し、あるいは画家の心象が山水の姿に投影し、画家は画面構成力、筆墨や賦彩の技巧の冴えを山水画に示した。

中国の山水画は、4世紀にその独立を見たはじめから、写実に対する強い志向があり、唐の中ごろ、8世紀に自然景の写実的描法が一応完成する。その直後、画家の意思の直截な表出として、墨の画的使用を軸とする水墨山水画が生れ、その後彫琢を重ねて、東亜独自の自然表現の系譜を形成する。

10世紀（唐宋・五代・宋初）に至り、中国各地の景観と気象に即した山水画風が成立する。それらはいずれも自然を大観的にとらえ、克明着実に自然を正確に写すとともに、対象に内在する「理」の造形的表現を旨とした。11世紀の半ばをすぎると、これらの画風を総合し、さらに理想化された自然を山水画に求めるようになる。これが徽宗の画院になると、詩情の表現が山水画の目標とされ、辺角的構図法に傾き、南宋院体山水画においては、筆墨の技巧はさらに洗練を加える。

13世紀（宋末元初）に水墨山水画の黄金時代を迎えるが、元になって線描主義と大観的構図法が復活し、感興本位の作画態度とともに、16世紀（明中期）以降の文人の山水画——南宗画の基盤となる。明代の前半には、南宋院体山水画の流れをくむ浙派

があらわれるが、これは形態に対する強い興味と筆墨技巧の顕示を特色とする。明代の後半以後、伝統を守る者、個性を発揮する者、折衝的傾向を示す者など、中国山水画壇は多士済々である。

中国絵画の史的展開に即してその特筆を明らかにするために、正倉院琵琶撥面の絵画、李成、范寛、董源、郭熙、李唐、馬遠、夏珪、梁楷、牧谿、玉潤、黄公望、呉鎮、王蒙、倪瓚、戴進、呉偉、張路、藍瑛、沈周、文徵明、文嘉、文伯仁、董其昌、張璠、倪元璐、王時敏、王鑑、王翬、陸治、李士達、米万鐘、丁雲鵬、呉彬、陸暉、張風、弘仁、八大山人、石濤、傅山、華嵒、黄慎らの作品をスライドで映写する。

(2) 文化財と合成樹脂 樋口 清治

合成樹脂を文化財に応用する研究は戦前の法隆寺金堂壁画保存に端を発し、奈良靈山寺三重塔の彩色保存にアクリル樹脂が用いられたのが最初である。戦後はいちはやく法隆寺金堂焼損壁画の保存や京都近辺の障壁画、建築彩色の彩色剝落止めにアクリル樹脂やPVAが用いられた。最近では合成樹脂の応用範囲も広がり、考古遺物・遺跡、石造文化財等にも適用されて来ている。

木造文化財に対する応用も著るしいものがあり、古材の再使用の割合が大幅に増大されて、従来破棄されて来た部分も使用可能となった。この成果は法隆寺羅漢堂、国宝如庵等の修復に大きくあらわれている。

これまでの処置例が主に化粧部材であったのに対し、最近では構造材にも応用され、民家の自然木の梁などを集成材で補強する方法が開発されつつある。

春日若宮の御祭り（解説） 中村 茂子

御祭りは、保延2年（1136年）当時流行していた悪疫及び飢饉に苦しんでいる人々を見た、時の関白藤原忠通が、五穀豊穰・悪疫退散を祈って春日神社の摂社である若宮の御祭神、天押雲根の命を勧請して祭を行ったのに始まるといわれている。この祭の大きな特色は、数多くの芸能が奉納されていることで、創始期から既に猿楽・田楽等多彩な芸能が演じられていた。

現在は、12月17日の午後、祭に奉仕する人々の行列が、興福寺の控所から御旅所に向って繰出される。行列が影向の松の下を通り過ぎる時、「松の下お渡り式」といって各芸能座が自分の持芸をクサリサつ演じて通る。行列が御旅所に到着すると、神事の後午後4時頃から東遊、社伝神楽、田楽、細男、舞楽、神楽式、和舞等数多くの

事業

めずらしい芸能が奉納される。また神霊奉還後の12月18日には「後宴の猿樂」といって御旅所の芝舞台上で金春座の能が数番演じられる。

3 公開学術講座

美術部

日時 昭和51年11月27日(土) 13:30~16:30

会場 日本経済新聞社小ホール(9階)

講演 (1)仏涅槃図 美術部第一研究室 関口 正之
(2)沖縄の縞と緋 “ 主任研究官 神谷 榮子

芸能部

日時 昭和51年12月16日 18:00~20:30

会場 朝日講堂

講演 (1)語りの民俗 芸能部民俗芸能研究室 調査研究員 仲井幸二郎
(2)語る読む咄す 芸能部長 三隅 治雄
実演 講談 田辺 南洲
落語 柳亭 燕路

4 会議

保存科学部・修復技術部

第6回文化財保存修復研究協議会

日時 昭和51年10月20日~21日(2日間) 10:00~17:00

会場 本研究所別館会議室

本年度は前年度に引き続き2日間にわたって行い、第一日目は「収蔵展示施設の保存及び展示環境」、第二日目は「古墳石室内の保存環境」をそれぞれテーマとして報告及び討議を行った。出席者は文化庁から坪井鑑査官以下、記念物課、建造物課、美術工芸課、無形文化民俗文化課の担当調査官、東京国立博物館工芸課、考古課、東京芸術大学美術学部、更に関係機関として奈良国立文化財研究所、元興寺仏教民俗資料研究所、美術院国宝修理所から出席を得た。

第1日 主題：収蔵・展示施設の保存および展示環境

(発表課題, 発表者)

1. 保存・展示施設の現況と問題点 文化庁文化財保護部美術工芸課 安藤 孝一
2. 収蔵・展示施設の設計計画の変遷
文化庁文化財保護部建造物課文化財調査官 半沢 重信
3. 学芸員とコンサベーター 修復技術部長 西川 杏太郎
4. 施設内環境の現状 保存科学部物理研究室 石川 陸郎
5. 環境汚染の材質への影響 保存科学部化学研究室 見城 敏子

第2日 主題：古墳石室内の保存環境

(発表課題, 発表者)

1. 保存施設の現況 文化庁文化財保護部記念物課 阿部 義平
2. 高松塚の保存施設 所長 関野 克
3. 古墳石室保存の諸問題 所長 関野 克
4. 古墳石室内の温湿度変化について 保存科学部物理研究室 三浦 定俊
5. 保存環境として見た古墳石室内の空気 保存科学部化学研究室 門倉 武夫

第7回文化財保存科学懇談会

日 時 昭和52年3月9日(水) 10:00~16:30

会 場 本研究所別館会議室

文化財の保存と修復に関し、保存科学部、修復技術部の調査研究が円滑に推進され、文化財保護事業に効果をもたらすことを目的として文化庁文化財鑑査官、記念物課、建造物課、美術工芸課の課長及び担当技官の出席を得て、本年度の両部の特別研究、受託研究、一般研究の報告を行い、昭和52年度の両部の調査研究計画を説明した。52年度から始まる特別研究「石造文化財の保存・修復に関する科学的研究」(3ヵ年継続)について文化庁側からの協力を求め、また文化財保存修復研究協議会及び研究テーマ選択について具体的な意見交換を行った。

5 国際交流

美術部

美術部の出版物、各種研究資料など諸外国との交換が活発に行われ、また外国の研

事 業

究者で、来所して美術部研究員の指導を受け、あるいは資料を利用して研究を行った者も多数にのぼった。

柳沢主任研究官と関口研究員は、韓国の古墳壁画、および各国・私立大学附属博物館の絵画遺品の調査を行った。(51.4—10.15)

久野第一研究室長は、アフガニスタンの仏教遺跡、およびパキスタンのガンダーラ地方の仏教遺跡の調査を行った。(51.8.15～8.28) その成果は、「パーミアン東大仏と鎗石」として『国華』1002号に発表した。

上野資料室長は、文部省在外研究員(短期)として欧米各地所在の中央アジア美術の調査研究並びに各国における文化財関係情報管理の調査を目的として、アメリカ合衆国及びヨーロッパ諸国へ出張し、中央アジアの壁画と敦煌絵画を中心に研究調査を行い、各地の図書館、研究施設において、図書写真資料の収集整理保管に関する調査を行った。(51.10.6～12.5)

芸 能 部

三隅部長は、国際交流基金からの依頼により、欧州及び北アフリカ諸国の芸能調査のため、フランス、モロッコ、アルジェリア、チュニジア諸国に出張した。

(52.1.15～2.14)

保存科学部

生物研究室新井研究員は、文部省在外研究員(長期)として、ヨーロッパ、アメリカ合衆国に出張し、文化財の生物劣化に関して調査研修を行った。

(50.11.28～51.11.27)

馬淵化学研究室長は、フランス国 C. N. R. S. からの招へいにより、希土類元素の微弱放射能の研究のためフランス国へ出張した。(52.2.27～8.31)

修復技術部

1. 海外出張

第二修復技術研究室増田勝彦研究員は3月8日からローマで開催された壁画修復コースに、文化庁から派遣され現地で研修を受けていたが、すべての研修を終え7月31

日に帰国した。(51.3.8~7.31)

2. 海外研究者の来訪

保存科学関係研究者、博物館関係者および文化財関係者の保存科学部、修復技術部への施設視察および意見交換のための来訪は相変わらず多かった。

チェコ国立博物館

A・スカロバ夫人(プラハ)

ロイヤルオンタリオ博物館

E・ファイリモア夫人(トロント)

S・スティブンス夫人(トロント)

中央修復研究所

P・モーラ氏(ローマ)

ユネスコ本部

トルチェンコ氏(パリ)

国立保存科学研究所

アグラヴァール氏(ニューデリー)

中国古代青銅器展工作組

莊敏氏(北京)

楊文和氏()

楊林宗氏()

韓国政府文化財管理局長

金石龍氏(ソウル)

ユネスコ本部

ダイフク氏(パリ)

VII 研究施設・設備

1 蔵書

美術部

日本・東洋古美術、日本近代・現代美術、西洋美術の全般にわたる研究書を中心に、関連図書、各種叢書・辞典類など、和漢書(29,068冊)、洋書(3,626冊)計32,694冊のほか、各都道府県市町村教育委員会編集の文化財関係報告書、美術関係雑誌、紀要類、売立目録、展覧会目録及び拓本などを所蔵し、部内外及び一般研究者の利用に供している。

芸能部

雅楽・能・歌舞伎・文楽・邦楽・邦舞・民俗芸能・寄席芸その他わが国の伝統芸能の研究に必要な図書3,993冊を所蔵する。演芸画報・歌舞伎新報・歌舞伎(第1次)・テアトロ(第1次)・上方・民俗芸術・日本民俗・芸能復興・郷土研究・旅と伝説等の雑誌、丸本・謡本等の台本も収集している。

保存科学部・修復技術部

古来の伝統的生産及び工芸技術書、技術史、または数少ないそれらの科学的究明を試みたもの、修理報告書、調査報告書、及び化学・物理・生物学部門の保存科学に関連ある和洋書を合わせて1,727冊を所蔵している。

昭和50・51年度の新蔵書数は次のとおりである。

区 分	美術部		芸能部		保存科学部 修復技術部		計
	和漢書	洋書	和漢書	洋書	和漢書	洋書	
昭和50年度	372冊	40冊	119冊	一冊	26冊	10冊	567冊
昭和51年度	995冊	21冊	384冊	16冊	55冊	11冊	1,482冊

2 資 料

美 術 部

当部の最も特色とするところは、美術史研究に不可欠な各種写真資料の整備である。実物よりの直接撮影による普通写真、カラー写真はもとより、赤外線、紫外線、X線、γ線、顕微鏡等特殊撮影による写真を含む写真資料の作成整理と、購入写真、複写写真による補足整備に加えて、印刷物をもおさめるという収集の方式は、写真資料の完璧な収集、保管を意図する原則のもとに、設立当初より一貫して力を注いできた。それらは日本・東洋古美術、日本近代・現代美術、西洋美術の全域にわたり、それぞれ絵画、書蹟、彫刻、工芸、建築等の諸部門に及ぶ。特別大型のものから小型のものまで総数凡そ24万点、原板保有量はほぼその3分の1にあたり、別にマイクロ・フィルム 250 巻がある。写真資料のほか、作家伝記資料、落款印章資料、近代・現代作家・団体・作品資料、資料スクラップ等と、図書カード、図版カード、各種索引類など多数。

芸 能 部

レコード・録音テープ・写真(8ミリ・16ミリシネを含む。)等による芸能資料を多数そなえている。レコードには毎年各製作会社から発売される伝統芸能関係レコードのほか、昭和35年度文部省機関研究費によって購入した安原コレクションレコード 5,450 枚が含まれている。安原コレクションは、明治・大正・昭和三代にわたって発売された各種邦楽レコードを網羅したもので、近代における邦楽の実態と変遷を知る上で貴重な資料である。録音テープ及び写真は、雅楽・能・歌舞伎・邦楽・邦舞・寺院行事・民俗芸能その他の伝統芸能を対象に記録してきたもので、演奏法の解析を中心とした写真・テープ、あるいは各種文書の記録写真等も含んでいる。種別による所蔵数は次のとおりである。

研究施設・設備

区 分	レ コ ー ド	録音テープ	シネフィルム		写 真
			8 ^{mm}	16 ^{mm}	
昭和50年度 までの累計	6,096 枚	1,897 本	168 本	3 本	多 数
昭和51年度	75 枚	67 本	10 本	0 本	多 数
計	6,171 枚	1,964 本	178 本	3 本	多 数

3 機器・設備

美術部

機 器

1 X線透過撮影装置

- (1) 可搬式ソフテックス装置 (J型) 1式
- (2) 可搬式ソフテックス装置 (新J型) 1式
- (3) 携帯用ソフテックス装置 (E型) 1式

2 紫外線照射装置

- (1) 可搬式照射装置 (フィリップス紫外線ランプ及び専用トランス) 2台
- (2) 携帯用紫外線検査器 1台

3 顕微鏡装置

- (1) 双眼実体顕微鏡及び写真撮影装置 1式
- (2) 新型双眼実体顕微鏡及びカラー顕微鏡写真同時撮影装置 (可動支持台及び携帯用スタンド) 1式
- (3) 検査顕微鏡用側視鏡ユニット・モノフォト装置 1式

4 マイクロ写真関係設備

- (1) マイクロ写真撮影装置 (付自動現像機, プリンター, 引伸機, 乾燥機等) 1式
- (2) ポータブル・マイクロ写真撮影装置 1式
- (3) マイクロ閲読機 (ルーモ社製) 3台
- (4) リーダープリンター 1台

5 デアスコープ (視聴覚教育装置) 1台

6	カ	メ	ラ	
(1)	リン	ホフ	カル	ダン
				1台
(2)	リン	ホフ	テヒ	ニカ
				3台
7	引	伸	機	
(1)	オ	メ	ガ	(4×5)
				2台
(2)	フ	ジ	A	690
				1台
8	複	写	台	コ
				ピ
				ー
				ス
				タ
				ン
				ド
				(1300)
				1台
9	乾	燥	機	F
				C
				オ
				ー
				ト
				(全
				紙)
				1台
10	マ	ル	チ	カ
				ー
				ド
				セ
				レ
				ク
				タ
				ー
				(H
				A
				C
				8
				4
				1
				S
				型)
				1式

芸 能 部

機 器

1	分	析	機	器
(1)	ビ	ッ	チ	レ
				コ
				ー
				ダ
				ー
				1台
(2)	メ	ロ	グ	ラ
				フ
				B
				T
				型
				1式
2	オ	ー	デ	ィ
				オ
				関
				係
				機
				器
(1)	テ	ー	プ	レ
				コ
				ー
				ダ
				ー
				15台
(2)	ビ	デ	オ	テ
				ー
				プ
				レ
				コ
				ー
				1台
(3)	ス	テ	レ	オ
				音
				声
				調
				整
				卓
				1台
(4)	ス	ピ	ー	カ
				ー
				4台
3	撮	影	・	映
				写
				機
				器
(1)	16%	撮	影	機
				1台
(2)	16%	映	写	機
				1台
(3)	8%	撮	影	機
				4台
(4)	8%	映	写	機
				2台
(5)	35%	写	真	機
				5台
(6)	35%	マ	イ	ク
				ロ
				フ
				ィ
				ル
				ム
				解
				読
				装
				置
				1台
(7)	16%	シ	ネ	フ
				ィ
				ル
				ム
				分
				析
				装
				置
				1台
4	照	明	器	具

研究施設・設備

(1) スタジオ用照明器具

1 式

保存科学部・修復技術部

機 器

1 強度・劣化試験機

- | | |
|-----------------------------------|-----|
| (1) サンシャインウェザーメーター（劣化促進試験機） | 1 台 |
| (2) 万能試験機（島津，オートグラフ，インストロン型，10トン） | 1 式 |
| (3) 回折格子分光照射器 | 1 台 |
| (4) 紙耐揉強度試験機 | 1 台 |

2 顕微鏡装置

- | | |
|------------------------|-----|
| (1) 金属顕微鏡 | 1 台 |
| (2) 生物顕微鏡 | 2 台 |
| (3) 表面アラサ顕微鏡 | 1 式 |
| (4) 万能顕微鏡 | 1 式 |
| (5) 走査型電子顕微鏡（JSM-50A型） | 1 式 |

3 分析装置

- | | |
|---|-----|
| (1) ガスクロマトグラフ（ガス分析，水素イオン化検出器・
熱伝導検出器・熱分解装置付） | 1 式 |
| (2) ポーターガスアナライザー（MIRAN-1型） | 1 式 |
| (3) 回折格子自記赤外分光光度計 | 1 台 |
| (4) " 赤外顕微鏡 | 1 台 |
| (5) 自動記録式示差熱天秤 | 1 式 |
| (6) 炭素・水素・窒素分析計 | 1 式 |
| (7) 光電分光光度計（自記） | 1 台 |
| (8) 螢光X線分析装置（標準型及び非破壊用大型試
料台つき） | 1 式 |
| (9) 可搬式螢光X線分析装置（現場可搬用） | 1 式 |
| (10) X線回折装置およびデバイシェラーカメラ，ラウエカメラ（結晶同定） | 1 式 |
| (11) 発光分光分析装置（M1型）（高圧整流スパーク，直流アーク） | 1 式 |
| (12) 質量分析計（JMB-05RB単収束型） | 1 式 |

4	非破壊検査装置	
(1)	X線発生装置 (60 KVP, 4 mA)	1 式
(2)	工業用X線発生装置 (200 KVP, 8 mA)	1 台
(3)	Co-60 γ線線源 (透視用 3c 及び 0.2c)	2 個
(4)	赤外線TVカメラ装置	1 式
(5)	超音波探傷装置	1 式
(6)	超音波探傷器 UFD-201型	1 台
(7)	超音波式コンクリート試験器	1 台
(8)	” 厚み測定器	1 台
5	物性測定機	
(1)	粒度分布測定装置	1 式
(2)	熱膨張計	1 台
(3)	レオメーター (粘性試験用)	
(4)	直読式動的粘弾性測定器	1 台
(5)	真空蒸着装置 (表面薄膜形成用)	1 台
6	照明及び温湿度装置	
(1)	自動分光放射計 (光源の分光測定)	1 台
(2)	ライトガイドカラーメーター (色彩測定)	1 台
(3)	恒温恒湿槽 (0°~40°C 20~90%)	1 台
7	殺虫殺菌装置	
(1)	滅菌装置	2 台
(2)	滅菌殺虫装置	1 台
(3)	ガス滅菌装置 GS-15特型	1 台
8	菌種保存用装置	
(1)	超低温槽 (-50°C)	1 台
(2)	冷却遠心機 (-5°C~5°C)	1 台
9	環境汚染測定装置	
(1)	粉塵計 (記録装置付)	1 式
10	修復処置装置	

研究施設・設備

(1) 真空凍結乾燥装置	1 式
(2) 減圧含浸装置	1 式
(3) エヤブラッシュ装置	1 式
(4) 合成樹脂圧入装置	1 式
(5) 水浸木材用含浸装置	1 式
(6) 熱風恒温乾燥機	1 台
(7) 装演用備品	1 式

4 黒田記念室

記念室は、本研究所の創立者故帝国美術院長子爵黒田清輝の功績を記念するために設けられたもので、黒田清輝の油絵・素描・写生帖等を陳列している。

収蔵されているものは、油絵 125 点・素描 170 点・スケッチブック等である。

これらは創立当時主として黒田家から寄贈されたものであるが、その後、照子夫人、樺山愛輔、田中良氏等からの寄贈も含まれており、随時陳列替を行っている。毎週木曜日午後 1 時から 4 時まで一般に無料公開している。陳列品の主なものは、「知感情」・「花野」・「湖畔」・「赤髪の少女」・「もるる日影」・「温室花壇」他である。

5 閲覧室

本研究所美術部資料室の図書及び研究資料は主として研究者・学者・美術関係専攻の学生等に公開している。年間の閲覧者数は、延 1,000 名程度である。

Ⅷ 旧 職 員

昭和51年度における転退職者

所 属	官 職 名	氏 名	在 職 期 間	備 考
庶務課	文 部 事 務 官 会 計 係 官 長	本 村 伝 一	34. 4. 1~51. 6. 30	日本学士院 へ転出
”	文 部 事 務 官 庶 務 係 官 長	若 井 明	49. 8. 1~52. 3. 31	文化庁文化 財保護部管 理課へ転出
”	技 能 補 佐 員	桑 田 勝 子	51. 5. 17~51. 10. 16	退 職
”	事 務 補 佐 員	関 口 富 子	50. 4. 7~52. 3. 5	”

Ⅸ 関係法規

◎文部省設置法（昭和24年 法律第146号
最終改正 昭和52年 法律第41号）（抄）

第3節 附属機関

（附属機関）

第36条 第43条に規定するもののほか、文化庁に、次の機関を置く。

国立博物館

国立近代美術館

国立西洋美術館

国立国際美術館

国立国語研究所

国立文化財研究所

日本芸術院

- 2 前項の機関（日本芸術院を除く。）の長は、文化庁長官の申出により、文部大臣が任命する。

（国立文化財研究所）

第41条 国立文化財研究所、文化財に関する調査研究、資料の作成及びその公表を行う機関とする。

- 2 国立文化財研究所の名称及び位置は、次のとおりとする。

名 称	位 置
東京国立文化財研究所	東 京 都
奈良国立文化財研究所	奈 良 市

- 3 国立文化財研究所には、支所を置くことができる。
- 4 国立文化財研究所及びその支所の内部組織は、文部省令で定める。

◎文部省設置法施行規則（昭和28年1月13日 文部省令第2号
最終改正 昭和52年4月18日 文部省令第10号）（抄）

第5章 文化庁の附属機関

第4節 国立文化財研究所

第1款 東京国立文化財研究所

（所長）

第117条 東京国立文化財研究所に、所長を置く。

2 所長は、所務を掌理する。

（内部組織）

第118条 東京国立文化財研究所に、庶務課及び次の5部を置く。

- 一 美術部
- 二 芸能部
- 三 保存科学部
- 四 修復技術部
- 五 情報資料部

（庶務課の事務）

第119条 庶務課においては、次の事務をつかさどる。

- 一 職員の人事に関する事務を処理すること。
- 二 職員の福利厚生に関する事務を処理すること。
- 三 公文書類の接受及び公印の管守その他庶務に関すること。
- 四 経費及び取入の予算、決算その他会計に関する事務を処理すること。
- 五 行政財産及び物品の管理に関する事務を処理すること。
- 六 庁内の取締りに関すること。
- 七 前各号に掲げるもののほか、他の所掌に属しない事務を処理すること。

（美術部の2室及び事務）

第120条 美術部に、第一研究室及び第二研究室を置く。

- 2 第一研究室においては、わが国の上代、中世及び近世の美術並びに東洋美術に関する調査研究を行い、及びその結果の公表を行う。
- 3 第二研究室においては、わが国の近代及び現代の美術並びに西洋美術に関する調査研究を行い、及びその結果の公表を行うとともに黒田記念室に関する事務をつか

関係法規

さどる。

(芸能部の3室及び事務)

第121条 芸能部に、演劇研究室、音楽舞踊研究室及び民俗芸能研究室を置く。

- 2 演劇研究室においては、演劇及びその保存に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。
- 3 音楽舞踊研究室においては、音楽及び舞踊並びにこれらの保存に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。
- 4 民俗芸能研究室においては、民俗芸能及びその保存に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

(保存科学部の3室及び事務)

第122条 保存科学部に、化学研究室、物理研究室、及び生物研究室を置く。

- 2 化学研究室においては、文化財及びその保存に関する化学的調査研究(分析化学的調査研究を含む。)を行い、並びにその結果の公表を行う。
- 3 物理研究室においては、文化財及びその保存に関する物理学的調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。
- 4 生物研究室においては、文化財及びその保存に関する生物学的調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

(修復技術部の2室及び事務)

第122条の2 修復技術部に、第一修復技術研究室及び第二修復技術研究室を置く。

- 2 第一修復技術研究室においては、木、漆その他次項の材料以外のものを材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究を行い、及びその結果の公表を行う。
- 3 第二修復技術研究室においては、紙、布又は革を材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究を行い、及びその結果の公表を行う。

(情報資料部の2室及び事務)

第122条の3 情報資料部に、文献資料研究室及び写真資料研究室を置く。

- 2 文献資料研究室においては、第118条第1号から第4号までに掲げる各部の所掌に係る文献資料その他の資料(写真資料を除く。)の作成、収集、整理、保管、公表、閲覧及び調査研究を行う。

- 3 写真資料研究室においては、第118条第1号から第4号までに掲げる各部の所掌に係る写真資料の作成、収集、整理、保管、公表、閲覧及び調査研究を行う。

◎文部省定員細則（昭和44年5月21日文部省訓令第12号
最終改正 昭和52年5月2日文部省訓令第20号）（抄）

文部省定員規則（昭和44年文部省令第12号）第2項の規定に基づき、文部省定員細則を次のように定める。

文部省定員細則

- 1 文部省に係る行政機関職員定員令（昭和44年政令第121号）第1条に規定する定員（以下「定員令第1条定員」という。）及び沖縄の復帰に伴う行政機関の職員に定員に関する法律の適用の特別措置に関する政令（昭和47年政令第191号）第1条に規定する定員（以下「特措法政令定員」という。）別の本省の各内部部局、各国立学校、各所轄機関及び各附属機関別の定員並びに文化庁の各内部部局及び各附属機関別の定員は、次の表のとおりとする。

文化庁

区 分		定 員 令 第 1 条 定 員
附属機関	国立文化財研究所	146 人 各国立文化財研究所を通じての定員とする。

- 2 各国立大学、各国立高等専門学校、各国立大学共同利用機関、各国立青年の家、各国立博物館、各国立近代美術館及び各国立文化財研究所の定員は、国立学校及び本省の附属機関にあっては文部大臣、文化庁の附属機関にあっては文化庁長官が、それぞれ、前項に規定する当該国立学校又は附属機関別の定員の範囲内において、別に定める。

附 則

- 1 この訓令は、昭和52年5月2日から施行し、改正後の文部省定員細則第1項の規定並びに次項及び附則第3項の規定は、昭和52年4月1日から適用する。

関係法規

◎国立博物館等の機関別の定員について (昭和44年5月26日文化庁長官裁定) (抄) (昭和52年5月2日改正)

文部省定員細則(昭和44年文部省訓令第12号)第2項の規定に基づき、各国立博物館、各近代美術館および各国立文化財研究所の機関別の定員を次のとおり定める。

機 関	定 員
東京国立文化財研究所	47人

附 則

この規定は、昭和52年4月18日から適用する。

◎教育公務員特例法施行令 (昭和24年1月12日 政令第6号) (最終改正 昭和50年4月17日 第74号) (抄)

(教育公務員以外の者)

(略)

第3条の2 文部省設置法(昭和24年法律 第146号)第14条〔国立の学校等〕及び第36条第1項〔附属機関〕に掲げる機関(日本芸術院を除く。)並びに国立学校設置法(昭和24年法律第150号)第3章の3〔国立大学共同利用機関〕に規定する機関の長及びその職員のうちもっぱら研究又は教育に従事する者並びに国立養護教諭養成所設置法(昭和40年法律第16号)による国立養護教諭養成所の所長、教授、助教授及び助手については、法第4条〔採用及び昇任の方法〕、第7条〔休職の期間〕、第11条〔服務〕、第12条〔勤務成績の評定〕、第19条〔研修〕、第20条〔研修の機会〕及び第21条〔兼職及び他の事業等の従事〕中国立大学の学長及び教員に関する部分の規定を準用する。この場合において、これらの規定中「大学管理機関」とあるのは次の各号の区別に従って読み替え、これらの機関の長及びその職員をそれぞれ学長及び教員に準ずる者としてこれらの規定を準用するものとする。

- 一 法第4条第1項〔採用及び昇任の選考〕については、国立学校設置法第3章の3に規定する機関の長及びその職員にあつては「文部省令で定めるところにより任命権者」、その他の機関の長及びその職員にあつては「任命権者」
- 二 法第4条第2項〔採用及び昇任の選考の基準〕 第7条、第11条及び第12条については、「任命権者」

附則（昭和50年4月17日 政令74号改正）

この政令は、公布の日から施行する。

◎東京国立文化財研究所部室長会議運営規則（昭和45年1月23日所長裁定）

第1条 東京国立文化財研究所部室長会議（以下「部室長会議」という。）の運営については、この規則の定めるところによる。

第2条 部室長会議は、本研究所の重要事項について協議し、各部課相互の連絡をはかることを目的とする。

第3条 部室長会議は、次の各号に掲げる職員をもって組織する。

- 一 所長
- 二 各部長
- 三 各室長
- 四 課長

第4条 部室長会議は所長が招集し、その議長となる。

2 所長に事故あるときは、会議出席者の中から互選により議長を定める。

3 所長は必要と認める職員を会議に出席させることができる。

第5条 部室長会議は原則として毎月1回開催する。ただし緊急を要する場合は、随時開催することができる。

第6条 部室長会議に関する事務は、庶務課がこれにあたる。

第7条 この規則に定めるものの他、会議の運営に関して必要な事項は、別に定める。

附則

この規則は、昭和45年1月23日から施行する。

◎東京国立文化財研究所受託研究取扱規程（昭和46年3月15日所長裁定）
昭和47年10月2日改正

（趣旨）

第1条 この規程は、東京国立文化財研究所（以下「研究所」という。）における受託研究（外部からの委託を受けて公務として行う研究で、これに要する経費を委託者が負担するものをいう。）の取扱いに関し必要な事項を定めるものとする。

2 受託研究は、研究所の文化財に関する調査研究上有意義であり、かつ本来の調査

関係法規

研究に支障がなく、当該年度の子算額の範囲内において行うものとする。

(受託の条件)

第2条 受託研究の受入れ条件は、次の各号に掲げるとおりとする。

- (1) 受託研究は、受託者が一方的に中止することはできないこと。
 - (2) 受託研究の結果、工業所有権等の権利が生じた場合には、当該権利を無償で使用させ、または譲与することはできないこと。
 - (3) 受託研究に要する経費により取得した設備等は、返還しないこと。
 - (4) やむを得ない事由により受託研究を中止し、またはその期間を延長する場合においても、研究所は、その責を負わず、また、原則として受託研究に要する経費を受託者に返還しないこと。ただし、特に必要があると認めた場合は、不用となった経費の額の範囲内において、その全部または一部を返還することがあること。
 - (5) 委託者は、受託研究に要する経費を、当該研究の開始前に納付すること。
- 2 所長は、前項に定めるもののほか、必要と認める条件を別に定めることができる。
- 3 委託者が国の機関、政府関係機関または、地方公共団体である場合は、第1項第3号および第5号の条件は、これを付さないことができる。
- 4 委託者は、必要がある場合は、所長の承認を得て、その委託にかかる研究を協力して行うことができる。

(決定の方法)

第3条 所長は、当該研究を担当する職員、当該職員の所属する室および部の長の意見を徴したうえ受託研究の受入れを決定する。

(受託の申込等)

第4条 受託研究の申込みをしようとする者は、別紙様式による受託研究申込書を所長に提出しなければならない。

- 2 所長は、受託研究の受入れを決定したときは、その旨委託者および研究所契約担当職員に通知するものとする。
- 3 前項の通知に基づき契約担当職員は、契約を締結した旨を、所長に通知するものとする。

(研究の中止等)

第5条 受託研究を担当する職員は、当該研究を中止し、または、その期間を延長する必要があると認めるときは、ただちに所属の室および部の長を経て所長に報告し、その指示を受けるものとする。

2 所長は、受託研究の遂行上やむを得ない理由があると認めるときは、これを中止し、または、その期間を延長することを決定し、その旨委託者および契約担当職員に通知するものとする。

(研究結果の報告等)

第6条 受託研究を担当する職員は、当該研究が完了したときは、その結果を所属の室および部の長を経て所長に報告するものとする。

2 委託者に対する受託研究の結果の報告は、当該研究を担当した職員が前項の報告後行うものとする。

3 受託研究の成果を公表するときは、所長の承認を得て当該研究を担当した職員が行うものとする。

附 則

この規程は、昭和46年4月1日から施行する。

附 則 (昭和47年10月2日改正)

この規定は、昭和47年10月2日から施行する。

関係法規

[別紙様式]

受託研究申込書

昭和 年 月 日

東京国立文化財研究所長 殿

住 所

氏 名 (名称・代表者)

印

東京国立文化財研究所受託研究取扱規程第4条第1項の規定により、下記のとおり受託研究の申し込みをします。

記

1. 研究題目
2. 研究目的および内容
3. 研究に要する経費
4. 研究用資材、器具等の提供
5. その他

黒田子爵記念室観覧規程（昭和12年11月29日制定）

第1条 本研究所の黒田子爵記念室（以下単に「記念室」という。）は、この規程によって一般に公開する。

第2条 観覧は無料とする。

第3条 観覧者は、備付けの帳簿に現住所、氏名を記載し、掛員の指示を受けるものとする。

第4条 陳列品の模写又は写真撮影を希望する者は、予め書面により届出で許可を受けなければならない。

第5条 観覧者は、記念室内において左の事項を行ってはならない。

- 1 陳列品に手を触れること。
- 2 インク・墨汁等を使用すること。
- 3 飲食及び喫煙をなすこと。

第6条 観覧者がこの規程に違反し、又記念室公開の趣旨に反する行為があると認めるときは、退場を命ずることがある。

第7条 観覧の日時は毎週木曜日午後1時から同4時までとし、観覧を停止する日は左の通りとする。

祝日

開所記念日（10月18日）

年末年始（12月25日から翌年1月6日まで）

夏期（7月21日から8月31日まで）

第8条 本研究所において必要があるときは、前条の日時を随時変更することがある。ただし、この場合は予め掲示する。

東京国立文化財研究所要覧(昭和51年度)

昭和52年8月25日 発行

発行所 東京国立文化財研究所

〒110 東京都台東区 上野公園13-27

電話 (823) 2241 (代)